

東方現転生一東方より伝わる異世界から現実へ転生した少女達一

じゃがバター(アツメツメタメ)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

120XX

とある東方に存在する異世界『幻想郷《げんそうきょう》』。

それは、皆が忘れ去った物が行き着くところでした。

忘れ去られた生物がいて、人間や動物だけではなく、さらに妖怪、

妖精、亡霊、仙人、神様…。

色んな、地球では見つかる筈がない生物までも生息します。

そんな異世界にて特定の少女達が失踪しました。

それも、この異世界にて重要な役割を持つ者が多いです。

しかし、この異世界の結界が破られません。

一体何故でしょう？私もわかりません。

そして少女達は人妖関係無く現実世界の人間となります。

いや、男性も含まれているかも知れませんが。

ですが、この後少女達はどうなったのでしょうか？

それを追う為、この物語は始まりますー

ー見えない試験は、誰にだってあるのです

それを越えてこそ勇者なのですー

CAUTION!!?

CAUTION!!?

CAUTION!!?

CAUTION!!?

CAUTION!!?

CAUTION!!?

この小説を投稿するのは初めてです。

なのでダメなところだらけかも。

なので、温かい目で見ておいてください。

日曜日か月曜日に、たまに火曜日に1話投稿します。

また、この作品は任天堂が販売した様々なゲームが影響している所があります。

その他、パロディやオマージュ等が無意識（能力ではない）に入ってしまうかも知れません。

後、旧作のキャラクターが多めです。

目次

登場人物 設定【シユール】	1
第1章 自然の中の安らぎ	
始まりの道のり	6
学びのある場所へ	11
人生で初めての学校に入る時	18
プラスチックマインド	23
ピクニックの距離よりも長い影	29
厄災の息吹	36
邪魔なやつら	42
悪党は哭く	54
悪夢は舞い降りた	62
ミンナニナギツ！改造生物の爪痕！！	70
悲しみの漁村	85
では、参る：	94
童心	105
不毛となった谷	113
造られし兵器	120
第2章 昔に取り残された者たち	
薄幸の孤立嬢	136
懐かしき山の自然	143

登場人物 設定【シユー】

黒夜 白海（くろや しらうみ） さかな組

主人公でたまあに意地悪なところもあるけれども心優しい女の子。

好きな物は特になく割と食べる。

村長の娘で、家族の事が大好き！兄が遊びに帰ってきた時はそれも犬のように…。

頭の中が犬のような知能ではない…むしろ子供なのに大人顔負けの賢さがあるのだ。

村人からも愛されていて、アイドル状態（村一番であり、どの女の子も人気）。

遊んであげたり、駄菓子をあげると喜ぶぞ。

海に泳ぐのは好きだが、親と兄が溺れないかよく心配される。

髪の毛はあんまり切られたくないみたい。

生き物と自然を侮辱する人が大嫌いで、今回の事件についてはすごく悲しみを背負っている。

彼女は日本人の筈だが、何故か目が青い。

黒夜 光影（くろや ひかりかげ） さかな組

白海の兄で、村長の息子である。

バカっぽいやつだが熱い男の子だ!!

正一とはすごく仲が良い幼馴染。

妹を大事にしている。

父とは体を動かす仲だが、母からは道具を没収されたり勉強をさせられるから嫌いらしい。

普段は大して体を動かさない。が、遊び（特に野球）になると全力になる。

しかもスタミナがそんなにない正一（さらに乱入してきた村人も参加する）とよくやるため大体勝っちゃう。

村人達からは人気が高い（特によく身体を動かす男達）。

博麗 霊夢（はくれい れいむ） さかな組

村に唯一ある神社の家の娘であり、第2の主人公。

楽観的な女の子で楽しめればなんだってオツケーらしい。

白海と魔理沙は大の仲良し！

神社より代々伝わる術を取得しているが、生き物の考えが読めたりお札を投げてペタッ程度。

努力が嫌いで、術を取得する際の修行は相当つらかったんだとか。なんせ魔理沙に無理やり修行させられたらしいから。

霊夢曰く『これを超える恐怖はないわ』とのこと。

実は異世界である幻想郷の神社の巫女。だけど何故かよくわからない漁村にて神社の家の女の子になっていた。

肉体は幻想郷の姿とよく似ている。

後にクロスベリーと名乗る謎の人物に記憶を蘇らせられた。

霧雨 魔理沙（きりさめ まりさ） さかな組

村に住んでいる不思議な英国人と暮らす金髪の少女で、だぜっ娘。明るく元気な女の子で努力好き！

霊夢と白海とは大の仲良しで、光影を尊敬している。

英国人からは魔法を教わっており、魔理沙は修行好きだった為案外強い。

霊夢を修行嫌いから直したいと考えている。

盗み癖があり、駄菓子屋の婆さんを欺いてはお菓子をちよつとずつ奪うずる賢い一面もある。

実は異世界である幻想郷の何でも屋。だけど何故かよくわからない漁村にて魔法使いの家の女の子になっていた。

肉体は幻想郷の魔理沙とそっくり。

ついでに修行好きと語尾、無駄な盗み癖まで似ている。

アリス・マーガトロイド さかな組

第3の主人公。

村内で希少な英国人少女で、魔理沙と共に魔法を学んでいる。こちらは魔道書を使う事と人形を操る術が得意。

気弱そうな女の子の面をしているが、気が強い。

魔理沙とは不仲で、よく喧嘩する。

エレンとはあの一件で初めて出会い、仲が良くなりました。

魔道書はそんなに扱えておらず、よく失敗する。

小学生の中でも一番インカーネーション軍の実態を知っており、忌み嫌っている。

実は異世界である幻想郷の魔女の1人。だけど何故かよくわからない漁村にて魔法使いの家の女の子になっていた。

肉体も幻想郷にいるアリスに似ている。

後にクロスベリーと名乗る謎の人物に記憶を蘇らせられた。が、同時に悪夢を見てしまった。

その内容はかつて魔界に住んでいた頃で、まだ魔女になっていない頃で、12歳。

夢子に対してはあの一件と重なった事から、相当トラウマがあったと思われる。

エレン

緑色の目で金髪を生やす欧米少女。魔女で1000歳以上も生きています。

電気魔法が得意だ。

長生き故に記憶を忘れてしまう事が多い。

髪に電気を蓄えており、魔法に反応して勝手に静電気として放出しちゃったりする事がある。

ソクラテスという名前の猫を飼っている。

村に来たのは最近らしく、村人とはすぐに仲良くなったが子供には存在を秘密にしている。

恋に飢えている。

かつて幻想郷にいた頃があるらしいが、出て行ったらしい。

ソクラテス

エレンの飼い猫。

目つきが悪い。

エレンはソクラテスが考えていることがわかるらしい。

十六夜 咲夜（いざよい さくや） かに組

小学5年生の銀髪少女。

宿『蛇寝処』のご主人の娘で、料理作りが上手！さらにみんなのアイドル的な扱いをされている。

幻想郷という異世界にいる咲夜という少女に似ているが関連性は不明。

ナイフ投げは危ないので出来ません。

時止めが出来るらしいが、信憑性はあんまり無いかも。

藤原妹紅（ふじわら もこう）
学校の教師だけど15歳。これはこの村では中学校を卒業して試験を受ければ教師になれるからだ。

若干男っぽさがある女の子で、若いのに白髪で炎も産み出す村一番の不思議っ子。

幻想郷の藤原妹紅との関連性は不明。不死身ではないけど見た目は同じ。

藤原（ふじわらの）ではない。

格闘技も強いので接近戦も油断してはならない。

村人からの人気は結構高く、特にご老人達からは手伝いや相談を受けてくれるということでもちらの方達からはもっと慕われている。

逆に、中学生の男子からの受けが悪い。

夢子（ゆめこ）

ならず者が結成した集団『インカーネイション軍』の大佐格。

見た目は金髪の少女で、メイドの服を着ている。

彼女自身人間だと自称しているものの、常人とは思えないほど身体能力の高さがうかがえる。つまり戦闘面では手慣れのプロ。

性格は冷静で、邪魔さえいなければ大人しい。

”邪魔”さえいなければ。

もし邪魔が入るとキレ始め、ナイフ投げもしくは蹴りをかましてくる。

逃げ切れる確率は非常に低く、もし逃げ切れても、尋常じゃない追跡力を前に見つかってしまうのがオチ。

その性格のせいで彼女が好きな人は少なく、嫌いな人は多数いるんだとか。

無類の甘い菓子とケチャップがけビーフジャーキーが好き。

第1章 自然の中の安らぎ 始まりの道のり

ガラガラガラ…

白海

『パパ、ママ、いってきます！』

光影

『んじゃ、一緒に行ってくるぜ！』

ママ

『行ってらっしゃい』

パパ

『気をつけて行くんじゃぞ』

今日はワクワクドキドキ小学校の入学式！

楽しみだなあ〜！

私はお兄ちゃんの腕を掴みながら行ってるよ！

え〜と確かここら辺にお友達の子の博麗霊夢へはくれいれいむ〜ちゃんが住んでいる…おっきな神社を経営している家族の家がある筈！

霊夢

『いってきます！』

ドタドタツ

白海

『ん〜、あ！霊夢ちゃん！おはよう！』

光影

『おや、白海の友人の霊夢ちゃんだ！』

霊夢

『白海ちゃんと光影さんだ！おはよう！』

白海

『ねえ！一緒にいこー！』

霊夢

『いいよ！おしゃべりおしゃべり〜！』

白海

『おしゃべり〜！たーのしい！』

光影

（かわいいなあ〜二人共…帰ったら駄菓子屋行ってチョコを白海にあげるか…）

今私達は森にいるよ。

いつも通る道だよ！

だけどちよつと暗い…お兄ちゃん行かないでね。

白海

『お兄ちゃん怖いよ…』

光影

『大丈夫だ、俺がいるんだぜ！おぼけが出たらなんとか説得するからさ〜！』

霊夢

『光影さん、蛇がいたらどうするの？』

光影

『え〜と、何とかする！』

ガサガサツ…

…ん？ガサガサって音が聞こえた。

なんだろう、ちよつと近づいてみよう。

蛇

『シャー！』

白海

『うっうわあ！へびだ〜！』

霊夢

『光影さん、出番だよ！』

光影

（うわああああ…恐いいいいい…こやつはアオダイショウだから大丈夫だ、だ〜いじょうぶ…）

『あの…建物、建物ら辺に行ってください…ブルブル』

蛇

『フシユー?』

(それは本当に安全かい?)

霊夢

『うーん、わからないけれども…その変なお家に住んでる人は危険かも知れないから…行くんだったら気をつけてね!』

蛇

『フシヤ、フシユー!』

(理解してくれるヒトがいるなんて…ありがとう、女の子!俺は頑張っけていくぜ!)

霊夢

『ちよつと待つて!リボンあげる!』

そういうと霊夢ちゃんはリボンを外したんだ。

それで、リボンを蛇さんの尻尾に結んだ。

蛇

『フシユー!』

(ありがとう!死ぬまで大切にするぜ!あばよ!)

霊夢

『うん!バイバイ!』

白海

『霊夢ちゃん…なんだか今の不思議!』

霊夢

『そうかな?ありがとう!』

光影

『よーし、行くぞー!』

―数分後―

光影サイド…

しかし…

中々にして疲れるよなこの森…土の凸凹が酷いからな…

アレ、二人はどこに行ったんだ…?

全く、道を知ってるからってガンガン進み過ぎだ…

んまあ連休明けで身体が鈍《なま》ってるから、休憩さ。
小学校が始まるのはまだまだ。

ゆったり生きていこうよ、人生は逃げないんだからね。

ん…？　そういえばなんであの変な…何故森の中にあるんだ？　家？

しかも家に使われてなさそう素材で作られてる気がする。

なんだろうな…見た事もない服装をしている人がいる。

不審だし、放課後に村長であるお父さんに報告…しよう。

よし、行くか！

光影

『おーい二人共々！　待ってくれー！』

タツタツタ…

一方…

謎の男性

『生物は捕らえたか？』

謎の男性

『ああ、捕らえた…どつさりとな』

謎の男性

『そうか…捕らえた生物をあのお方に献上させよう』

謎の男性

『そうだな…んじゃあここら辺で切り上げるか。ここを調査しに来たのもあんたと俺だけだしなあ』

謎の男性

『あのお方に頼んで生物を改造してもらって、ペットにして飼いたいなあ…でもあのお方は自作に強烈な愛を示すんだよね…やつぱり自分で改造した物は誇りがあるよね』

謎の男性

『それもそうだが…そろそろ行かねーとマジイぞ、さつき現地に乗り物を見られた。このまま現地人同士で知らされたらあの金髪でツインテールの髪型の…幹部のお方にタライ落としならぬパイプ椅子落としの刑が…』

謎の男性

『ああ、ああ見えて恐いよ、ちより？ちゆれ？なんだか忘れちゃったけど、そんな女の子なんだよね…あ？向こうに蛇がいるぜ』

謎の男性

『へへっ、可愛らしいリボン付けやがって！さてはどうぞ捕まえてくださいアピールだな！』

謎の男性

『取っ捕まえたぜ！こいつは俺より長いぞ!!あのお方に改造されて強くなるんだぞ！』

謎の男性

『よし、中入れ！そろそろ離陸する！』

ピポピポ…

ギューイイイイイン!!!

光影

『…なんだアレ、さっきあった変わった家が飛んでる！』

白海

『うわあ！不思議！』

霊夢

『すごい！』

光影

『なんだろう、嫌な予感がするぜ』

霊夢

『そろそろ学校だよ！』

競争しよう！』

白海

『うん！いいよ！』

光影

『俺はお疲れだから歩いて行くぜ…』

こうして、少女と少年は登校する事に成功した。

ただ、あの不思議な飛行物体はなんだろうか？

次回へ続く

学びのある場所へ

タツタツタ…

到着…：小学校の門の前にいるよ！

桜がきれ〜い！

門は鉄で出来てて、木で出来た鍵が掛かってる…。

白海

『うう〜疲れたあ〜…着いたね、学校だよ！』

霊夢

『そうだね、楽しみ！ワクワク』

光影

『ぐう…フヒイ〜…連休明けは疲れるよ…』

白海

『お兄ちゃんは頑張ったよ！』

光影

『そうだな！久しぶりではないが、友達に会えるから楽しみだ！去年は俺含めて6人だが、今日は何人入るんだろうな！』

学校楽しいだなあ〜！

沢山お友達出来るかな？

目標はみんなとお友達になる！

よくし、頑張ろー！

ドコドコドコオツ!!!

ゴツン！

少女

『うわあ〜いてててて！気をつけてほしいよ〜！』

霊夢

『こつちが気をつけてよく、いたた』

少女

『う〜ん、つて、アレ、霊夢だ！私だよ！霧雨魔理沙？きりさめ まり さ』だよ！そろそろ初めての小学校だぜ！』

霊夢

『魔理沙かあ…うう、いたた』

白海

『魔理沙ちゃん、おはよう!』

魔理沙

『へへっ、白海じゃないか!あと白海の兄さんもいる!』

光影

『やあ、小学生になれるんだからおめでとうだな!それとお前は男の子っぽいけど、まあそこも好きだぜ!』

魔理沙

『へっへへ、ありがとう!光影さんに憧れて真似してたらこうなっちゃったんだぜ!』

魔理沙ちゃんはいつも元気!男の子と遊ぶのが多いのと、お兄ちゃんに憧れて、

ちよつと男の子っぽい女の子だよ!

それに魔法が使えるんだって!見てみたいなく。

魔理沙

『よくし、今から小学校の門に入りたい…けど、閉まってるう、えーい!』ビィ…

そう言ったら魔理沙ちゃんの指から光る…線?が出てきた!

白海

『わっ!指から眩しいのが出て…門の鍵が燃えちやってる…これが魔法って言う物?』

魔理沙

『そうだけ、光線を出す魔法なんだ!熱いぞく?』

霊夢

『熱いも何も、木の鍵が燃えちやってるよ…』

魔理沙

『先生が来たら白を切ろう、命を賭けて』

白海

『うう…やだあ、先生に言っちゃう』

魔理沙

『お許しを〜』

光影

『お許しも何も、張本人でしょ!』

魔理沙

『お願いだよ、白海、先生に言わないでください〜』

白海

『聴こえないなあ〜』

魔理沙

『うわ〜、白海のいじわるう』

霊夢

『まあまあ、意地悪はしないよ』

光影

『白海は意地悪をしない女の子だと思ってたぜ』

白海

『う〜、反省します』

ガサゴソ…

悪いリーダー

『へっへっへ…これが新入生か…悪い子め、意地悪してやろう』

悪い奴A

『そうだな…たつくさん意地悪して泣かそうぜ』

悪い奴B

『そして学校は俺達のモンですぜ、アニキ!』

ドス、ドス、ドス…

悪いリーダー

『へっへっへ、ガキ共、悪い事してたな?先生に言ってやるぞ?』

魔理沙

『う、うわあ!な…なんだお前は!』

悪いリーダー

『俺はナンじゃねーぜ!よし弟分達よ、囲め!!』

悪い奴A

『逃すかよ!』

悪い奴B

『これで袋小路だ!』

霊夢

『いやだ! 怖い! 光影さん助けて!』

白海

『うわぁん! 怖いよ! お兄ちゃん助けて!』

悪いやつら

『ひゃーっひゃっひゃっひゃ!』

光影

『ケツ、悪者め、俺を舐めんなよ! あ、ベロで舐めるんじゃない、実力を舐めんなよ!』

悪い奴A

『身の程知らず! アニキに掛かるのは数ヶ月早いぜ!』ドゴオ

光影

『いったあ! くはない!』

悪い奴A

『どっちだ! 間際らしい! まあいい、最強のパンチ! 超衝撃インパクトをくらえ!』バゴオン!

光影

『ブゲッ! さすがに痛! くはない!』

悪い奴A

『うわぁ! 耐えてる! ガキの癖にい! 勝てそうにない、替わって!』

ドツドツド...

悪い奴B

『頑張ってくれよ、全く! えーと、怖い! ヒイイ!』

(なんでだ? こんな弱つちいガキなのに! 怖い! なんだツ!?)

光影

『村の長に言うぞ? フッフッフ! 牢屋行きだぜ?』

悪ガキB

『ヒイ、それだけはお勘弁ください!』

光影

『じゃあ兄貴分と闘うから引つ込みなされ』

悪ガキB

『うわあく失礼しちゃいましたくアニキ助けてー!』
ドストドストス!

悪いリーダー

『よくも弟分を傷つけたな!許さぬ!!うおー!』

光影

『よくも新入生を驚かせたな!許さぬ!えびー!』

その頃…

魔理沙

『な…小学校に入る前にこんな試練があるのか?』

霊夢

『わかんない』

白海

『私も…先生は来るのかな?』

…なんだろう、向こうにいるお姉さん、
こつちに来る。騒ぎに気づかれたんだ!

光影

『うぐつ…なんか痛くないが…痣があちこちにある…』

悪いリーダー

『ああ?降参しな!コテンパンにするぜ!…ん?うアチチチチ!!
水うー!!!』

悪ガキA

『なんだ?自然に発火してるぜ、アニキ』

悪ガキB

『なんだあのおばさん…いや、ん?おばさんじゃない、アレは…』
一同

『誰だ!』

うわあ…アレは誰だろう…

髪が白くて長い…けどなんだか怖い!

お姉さん

『なんか騒がしいと思ったらガキかい、しかも朝っぱら騒いで…』

悪いリーダー

『ひ、ひいいいアチイイ!!すみませえん!アツツ、お許しを〜!』

お姉さん

『本当に?子供は傷付けないね?』

悪いリーダー

『はいいいませえん!熱いから火い消してえ〜!』

そう言くと、悪い人の腕に燃えてた火が消えた。

あのお姉さんも魔法が使えるのかな?

お姉さん

『はい、消したから中学校にお行きなさい、小学校の職員になるんだつたら中学校を卒業してからね…それと、さっきの火は人を怒らせたら起きる物だからね』

反省したやつら

『はい〜以後気をつけますう〜』ダダダダダダ…

そういうと悪い奴どつか行つた…

ありがとう、お姉さん!

光影

『うおお…よくわかんないけどお姉さんありがとう!もしかしたら…あなたは魔法使いですか?』

お姉さん

(あちやく…名乗るのを忘れちゃったな、私ったら)

『魔法ではない、使えるのだ…最初は小さくて一瞬だったが、今や自由自在に操れるんだ』

女の子達

光影

『すごい…』『熱いやつだぜ』

お姉さん

『みんなには秘密だ…後そうだ、私の名前は藤原妹紅?ふじわらのもこう?で、君達の小学校で新しく先生をするんだ、よろしくね』

光影

『俺は黒海光影、黒髪で眼が青い女の子は妹の白海です』

霊夢

『私は博麗霊夢って言います、よろしくお願いします』

魔理沙

『私は霧雨魔理沙ですわ』

妹紅

『よし、みんなより早い、小学校だな！門に南京錠が掛かってるから鍵で…アレ？ない…あるのは燃えカス』

みんな

『しーらない』

妹紅

『えく…校長先生になんとおっしやれば…しらを切ろう』

彼女達は、桜が舞い散る校庭を歩み、教室へと向かう。

果たして、無事に帰れるのだろうか…

次回へ続く

人生で初めての学校に入る時

目の前にドンとある、木で出来た大きな学校…

魔理沙ちゃんが開けた門…舞い落ち、綺麗に飾られた桜の花…さえ
ずる小鳥…

そして、豊かな土に後ろから香る磯の匂い…

学校生活楽しみ〜！

一同

『おお〜』

妹紅

『お父さんが数週間前に天に昇って行ったから、やる事になったが…
何年振りだろうな』

魔理沙

『ええ〜！お父さんいたんだ!!』

妹紅

『そうだよ。お父さんはね、ここで先生をやってたの』

光影

(藤原火之助《ふじわらのひのすけ》先生…前は元気だったのに)

霊夢

『白海ちゃん、楽しみだね』

白海

『そうだね！楽しみ〜!!』

そんな話をしながら歩いてて、学校の中に入って…
張り紙をお兄ちゃん達と見て、

1階にある1号室って言う部屋だよ！

あ、藤原先生は別のお部屋に行ったみたい。

白海

『わあ！すごい！机も椅子もキッチンとある!』

霊夢

『一緒になれて良かった〜』

魔理沙

『そうだな！仲良し同士もつと仲良しになろうぜ！』

白海

『うん！』

光影

『あく疲れた、寝たいよー』

霊夢

『せっかくだし寝ましよう』

そう霊夢ちゃんが言うのと、お兄ちゃんや魔理沙ちゃんは寝ちゃった。

霊夢ちゃんもしばらくして、私も…ふわわ…

一同

『スウー…スピーー…』

数分後

ガラガラガラ…

???

『…なんだろう、寝てる』

…みんなが寝てる内に自己紹介するね。

私はアリス・マーガトロイドって言うの。よろしくね。

お人形さんが大好きなんだけど、最近不思議な力で動かせるんだ。

まあその、本当は本で魔法を使うのが得意なんだ。

えつと…ペラペラ…よし、今から光る魔法をするね！

えいっ！ドゴオオオオオ

一同

『うわあああ!!』

アリス

『……………』

…あ、間違えて爆音の魔法をやっちゃった。

しーらない

タッタッタ…

魔理沙

『うゝ、なんだったんだ今は…』

霊夢

『耳がやられちゃった』

白海

『キーンって音がするう』

光影

『一瞬落ちたかと思ったぜ…昼寝中に起きちやうとこうなるんだぜ』

一方その頃…

アリス

『うわゝゝん、魔法を間違えちゃったー！しくしくしく』

えっと、会話パートが移り変わったけど…どうしょー！

光る魔法を出すつもりが！

間違えちゃったよゝ！もっと修行すれば良かったのよー！！

今、走ってるけど…場所がわからなくい!!!

ドカツ

いてて…

???

『いたた。大丈夫、君…見る限り初めて学校に来た女の子だけど…怪

我はある？』

アリス

『いてて…あなたは誰？』

咲夜

『十六夜咲夜《いざよい さくや》って言うの。よろしくね』

(質問はキチンと返してね)

アリス

『私はアリス・マーガトロイドだよ。よろしく』

咲夜

『よろしくね…じゃあ、私は失礼するとします』

アリス

『うわっ消えた！』

そういうと、咲夜さんは突然姿を消した。

あーびつくりしたあ…。
うーん、なんだか退屈。

玄関から声がするから、そろそろかな。
でも、もうちよつと探索してよーつと。

一方その頃…

男の子

『おはよう、黑夜光影！』

光影

『おはよう、鈴木正一《すすき まさいち》！』

正一

『今日から学校だね！僕は勉強が…うーん、普通だけど、普通かな』

光影

『そーだな！授業面倒臭いけど、ガンバローな!!』

正一

『うん！わかった!』

白海

『しりとり』

霊夢

『リンゴ』

魔理沙

『ゴマ』

白海

『マグロ』

霊夢

『蝋燭』

魔理沙

『栗』

白海

『り…参りました』

霊夢と魔理沙

『私の勝ち』

こうして私はしりとりに負けました。

…そろそろ先生が来るかも。

足音でわかるんだもん、ずっしりした…大人の足音。

でも、あと一人で全員みたいだけど…なんでいないんだろう？

白海

『最後の人って、誰だろう？』

アリスは探索を続けているのか…？

次回へ続く

プラスチックマインド

ギシイ…ギシイ…

あ、これは足音ね。

私はアリスだよ。

前回魔法間違えちゃって皆のお昼寝の邪魔をしちゃった私だよ。

あのお部屋、戻りづらいんだ。

怒られるの嫌だ。

先生にも、ママにも。

どうせ私なんて。

アリス

『はあ…もうやだ、おうちに帰りたい…お水飲まなきゃ』

私はお水を飲んだ。美味しい。

あ、白い猫さんだ。廊下の出窓から入ってきた。

この辺では白猫なんて見かけないけど…誰か逃してしまったのかな？

寄ってきたから、手首で皿を作って優しく乗せた。

私は水を飲んだ場所の前にある、お日様の光が差す出窓の前でぺたんと座る。

アリス

『ごきげんよう、猫さん。あなたは私の事、好き？』

猫

『ニャ〜』

アリス

『好きなんだ…ありがとう、私もあなたが好き』

猫

『ニャン！』

アリス

『じゃあ、そろそろ行かなきゃ…だから、バイバイ』

猫

『ミイ…』

アリス

『ごめんね…バイバイ』

そう言って、私は猫を出窓に置いたけど…ん？

なんだろう、あの校庭の真ん中にお姉さん…変な服装してる。

なんでそこにいるんだろう？

それに…こっち見てる。おっきな…アレはなんだろう？何か持つて…

ズドン!!

アリス

『ひゃー!』

うわっ!突然何か飛んできた…?

投げてきたものは壁に刺さった。

何コレ…包丁の一種かな?

でも、危ないよコレ!

私の頭よりおっきい!!

…いつの間からか、あの人、学校の中に入って来てる!

???

『外しましたか…イヤ、むしろ当たるかと思い、ヒヤヒヤしましたが…』

アリス

『誰よ、あなた』

???

『私?子供に名乗る程ではございません…ふふふ』

アリス

『ここは子供だけが来る所!お姉さんは危ない人だからダメ!』

???

『じゃあ、先生はどうかなく??違うじゃない。今、私はあの壁に刺したアレを残り999本持つてるんだ。大人しく私に付いてきたら、刺すのもやめるよ。先頭も歩かせてあげる、リーダーになれるチャンスだよ!手伝わせたい事があるから、終わったらお菓子あげるよ?私の団体のボスが作ってくださいるお菓子だよ!!』

アリス

『やった！お菓子大好きー!!…でもあなたは悪い人じゃないよね?』

???

『ええ勿論！悪い人ではございません！ほらほら、早く行きましょう』

アリス

『うくん…あ、誰だろう、あの人』

走って来てる…金髪で、赤いリボンを髪に付けてて…はたらきものっぽい性格そうで…。

ニコニコしてる!!ちよつと髪の毛がビリビリしてるけど、アレはなんだろう？

すつごい遠くからそう見える。

???(以下ふわふわお姉さん)

『ソクラテスウゝ逃げちやダメ…あいたたた、髪の毛がビリビリしていたくらい！魔法使いがいるのかなあ？それになんだかうるさいなあ』

アリス

『お姉さん、助けてください！恐いお姉さんが連れて行こうと…』

ズドン!!

???(以下ナイフなお姉さん)

『ダメじゃないか、私のお手伝いをしないと!!』

アリス

『うわわわわー！危ないよ!』

ナイフなお姉さん

『逃げたらダメだよ逃げたら！逃げたらこの村にあるお野菜ぜんぶにいったいハエ撒き散らして畑の人を働かせないようにするよ！それであんたは村長に怒られてママにもパパにもお友達にも嫌われて動物にも嫌われてしくしくしくするんだよくだあ!!(早口)』

アリス

『うう…』

私は、すごい嫌な気持ちになった。

涙が出てきそうな感じで…。

悔しくて、悲しくて、怒りたくて…。

ナイフなお姉さん

『はい、きょくせい！連れてってやる〜！』

アリス

『いやだー！助けてー！』

もう、私はここで終わりなのかな…さようなら、ママ…パパ…生きてるのってつらいね。

涙が止まらない、息するのもつらい…。

突然、お姉さんは包丁の一種のような何かを手にとって…

ナイフなお姉さん

『じゃあ、お手伝いよろしくね！そして、逃げたら…こうだからな！かく…うあ！イテテテテー！！』

ふわふわお姉さん

『子供は優しくして、ね？ナイフなお姉さん』

助かった…ようやくたどり着いたのか。

悪いお姉さん、黒コゲになってる。落とした包丁の一種のようなものはバチバチした何かに取り憑かれている…。

ナイフなお姉さん

『うう〜痛いです。あなた…いや、お前！！よくもやってくれたな！！よくもこんな私に…！！まず、名を名乗りなさい！！』

エレン

『わ…私は、エレン。ふわふわエレンよ。この子は無実な女の子なの。だから、離して欲しいわ』

ナイフなお姉さん

『ちっ、お前みたいなのやつはじゃがいもを生で食べて食中毒になるのがお似合いよ！！まあいいわ、ここら辺で置いとします。じゃあね！』

そういうと悪いやつは緑色に光る線で自分の形を象つたような姿になった後、消えた。

初めての学校って、こんな試験があるのかなあ…。

エレン

『大丈夫？怪我はしてない？』

アリス

『う、うわあああ!!』

私はさつきより泣いた。

すぐくつらかった。ありがとう…。

向こうの声1

『さつきから騒ぎがするな…全く、暴れて…』

向こうの声2

『きつとお化けだぜ! 私はそう思うぜ!!』

向こうの声3

『お兄ちゃん、お化けだったら退治してね!』

向こうの声4

『私の術で封印するから大丈夫だよ!』

エレン

『えっと…そろそろ行かなきゃ。私はこの村の人じゃないんだ。他の人に見つかったらまずいのよ。でも、もしも何かがあったらいけない…だから、コレを渡しておくわ。ところで…お名前はなんていうのかしら?』

アリス

『アリス・マーガトロイド…』

エレン

『うん、私はエレンよ。よろしくね』

そう言われると、黄色い、横に歩く猫の形に彫られた…手よりおっきな石を貰った。

裏に貼り紙…えーと…『これを使うといつでもエレンと会話できるよ!』って書いてある。

エレン

『寂しかったら、これでお話ししようね、約束だよ?』

アリス

『うん、ありがとう!お姉さん!』

そして、エレンさんはバチバチと音を立てて消えてった。

なんだろう…私は自然と涙が引いてきた。だって、安心したんだも

ん。

…みんなに爆音を鳴らして起こしたの、謝ろうかな…でも、あの人は一体何者なんだろう…。

???

『あの少女め…腕をまっ黒ゴゲにしやがって…』

???

『おや、もう戻って来たのか…』

???

『そうだ…あのお方様が見逃すとはね…エレン、1000年以上も生きる魔女だ…』

???

『何、エレンだ?!? ついに出了か…偶然だが、見つけた事は誉めてやろう。やつは實力は桁違いだ。要注意人物として捉えろ。日が沈む時、部下に争いの種を撒く。そして、私が空を飛び、森を火の息で焼き払う。火祭りと行こうじゃないか』

???

『近代化をも知らぬ哀れな人共よ…最新技術で作られし生命体『合成生物? キマイラ』を解き放つ…暫しその時を待つが良い! フハハハハ…フハハハハハ!!』

続く

ピクニックの距離よりも長い影

なんと！学校が始まる日は遠足もあるんだって！

今日は裏にあるワシタカ山に行くんだって。

そこでお弁当を食べるみたい。

今校庭に居ます。

校長先生

『みんな、よー集まったじゃん』

妹紅

『はい、全員集まりました。ですが、アリスちゃんの腕に怪我があるのですが…』

校長先生

『そんなもんだあじょうぶ。わしが連れてくんかんよー』

妹紅

『ありがとうございますっ』

白海

『ねえアリスちゃん、泣き止んだ？今日は楽しい遠足だよ』

アリス

『そうだね…うう…』

アリスちゃんの腕を今見たけれど、怪我してる。痛そうだけど、我慢してる…。

校長先生

『アリスくん、遠足はわしと行くべ』

アリス

『わかった…（この人が校長先生かな？）』

魔理沙

『早く行こーぜ！』

霊夢

『魔理沙、静かにね』

魔理沙

『はあい』

光影

『正一、じゃんけんしよーぜ!』

正一

『僕が勝つよ!』

光影

『よし、じゃあ負けたら虹色トカゲ捕まえるよ!じゃんけん…ポン!』

光影…グー 正一…パー

正一

『やった、勝てた!』

光影

『そんなあー!』

妹紅

『それより、先生達はどうしたんですか?』

校長先生

『おお、忘れとった。残念ながら来とらんぞー』

妹紅

『そうですか…それでは、ご出発をしますか?』

校長先生

『そーだ、くつちやべってねえで呼びかけるのじゃ』

妹紅

『わかりました…』

こうして、全員の呼びかけが終わり…

山に登りました。

白海

『いいい!山登り楽しいー!』

ちなみに白海ちゃんは霊夢と手を繋いでいます。

霊夢

『楽しいね』

魔理沙

『そうだな!山頂はちようちよもいっぱい綺麗なんだろうな!』

光影

『はっはっは！楽しすぎて木を殴って壊せそうだ!!』

正一

『光影、後ろの事も考えてね…』

光影

『あ、ごめんごめん！後ろにさかな組がいるの気づかなかった!!』

正一

『全く…でも元気でいいね、僕も元気が湧いて来たよ』

光影

『おお、そうかそうか…山とは言え、疲れやしねーぜ!』

正一

『ううう疲れた…光影、後はよろしくな…』

光影

『倒れるのが困れるんだよなあ…』

山登り中、私達はお花で髪飾りをし合ったり、ちようちよを追っか
けたり、てんとう虫さんを触ったりして遊んだよ！てんとう虫は臭
かったけどね…あ、お兄ちゃんはニジイロトカゲを捕まえたみたい！
途中、蜂がいたけれど…校長先生が追い払ってくれた！ありがとう
!!

そうこうしている内に、山頂に辿り着いた！…疲れた。

ガールズ・カルテット

『着いたー!!』

妹紅

『ふう着いた、後は校長先生を待つだけか…（お弁当を持っているか
ら）』

光影

『あ、正一…首元赤いけど…搔きむしり過ぎたのか？消毒液やるよ』

正一

『あ、ありがとう…』

一方、アリスのペースに合わせている校長先生は…

校長先生

『はあ…わしやこの山苦手なんよー』

アリス

『そうですか…うつ！』

どうも、アリス…より、腕が痛い…！

傷口は大きくないのに、凄くズキズキする…。

痛い…。

校長先生

『アリスくん、大丈夫かー』

アリス

『痛い…！うつ…』

校長先生

『泣くじゃねえ、ハンカチ拭いてやつから』

アリス

『うぐう…スウ…』

痛いけど、頑張ればきつと良い事はあるよ。

一歩一歩、前に進むべき…。

…物音が!!

ガサア!!!

熊

『グオオオオーツ!!』

校長先生

『ヒィィィ!!熊じゃあああ!!!』

アリス

『うわあ、熊さん!!怖い、でも頑張らないと…もし、またあの謎の服装をした女性が現れた時の為に…』

えつと…

魔法書を開いて…えつとえつと…光の魔法だ!

アリス

『これでもくらえー!』

熊

『グオキィ!!』

…アレ?光らない…つてうわあ!!また間違えちゃった!!

と思っっていたら熊…倒れてる。ついでに校長先生も。

あ、熊さん…校長先生が倒れて落とした弁当の中身で許してね。
でもどうしよう…校長先生は倒れてるけど、私一人では無理だよ…
あ、そうだ！

アリス

『でんわいし…これよこれ』

チリリン、チリリン…と、音になる。

この音…黒電話にそっくりね。

エレン

『はい、エレンだよ…あら、アリスちゃんね？どうしたの』

アリス

『えっと…お山に登っているんだけど、校長先生が倒れちゃって…』

エレン

『あらあら、倒れちゃったのね。えっと…あなたがいう山は学校の裏にある山かしら？』

アリス

『よくわかったね。でも、どうすればいいかな…』

エレン

『わかった、そこで大人しく待っててね』

アリス

『は、はい…』

どうしよう…熊はそこで気絶してるけど…起きたら恐いなあ…。
まあいつか、エレンさんが来るまで待ちぼうけしよ。

一方、白海達は…

妹紅

『校長先生来るの遅いな…』

白海

『そうだね』

魔理沙

『おい、もう先に食ってるぜ私』

霊夢

『魔理沙ダメだよ！先に食べちゃ』

魔理沙

『おーこのアジはいい!!』

霊夢

『私アジ嫌い…』

光影

『アジは春に食うと美味しいんだぜ!』

白海

『そっかあ〜』

妹紅

『魔理沙が先に食ったからみんなも食うわよ。かに組、さかな組のどっちか誰か号令を』

咲夜

『あのー…アリスちゃんが…』

妹紅

『あ、アリスちゃん…遅いな、校長先生はご老体だからどっかで休憩してるかもな。じゃあ、話を切り替えて…誰か号令を』

白海

『はい！私！私がやるー!!』

妹紅

『よし！白海ちゃん偉い!』

白海

『手を合わせて…』

みんな

『いただきまーす!!』

ガツガツ！ムシヤムシヤ！ガツガツ！
ガツガツ！ムシヤムシヤ！ガツガツ！
ガツガツ！ムシヤムシヤ！ガツガツ！

その頃…

アリス

『早く行かないとエレンさんが困っちゃう…!』

ゴオオオオ…

アリス

『…?…なんの音かしら?』

そうやって私は道外れの崖っぷちに行ってみたけれど…ヒヤヒヤするう…。

でも、アレは…?

…うわあ!

…数時間後

エレン

『起きて、アリスちゃん…大丈夫? 痣と砂だらけで可哀想…よいしょ』

アリスちゃん…今大変な事になってるの…。

火事があちこちに…だから、起きるまで待っててね…。

私は魔女。煙ぐらいで倒れたりなんかしないわ。

一体、その数時間内になにが…次話にて明らかになるだろう。

次回に続く

厄災の息吹

午後6時、ウインドの森

ゴオオオオオオオ

謎の男性1

『これでもくらえー!!ヒヤーツハツハ!!』

IMG53882

彼は突然そう言うと、謎の爆弾を設置した。

様々な箇所で燃える木々の影響か、動物達は逃げ惑う。

謎の男性

『お、おい早く行こうぞ!爆発したら火い飛ぶぜ!』

謎の男性

『行くぜー!つ、あらあ!』

謎の男性

『木にぶつかってどうする!!もう引きずるよ!』

煙を出した爆弾は爆発。

辺り一面が火の海になるほどの火力があり、木はみるみる内に燃え広がる。

???

『ははははは!私が一度吹いた火の息の炎がかなりの勢いで広がって行く::目的地まであと少しだ、その探している間に全て焼き焦がすが良い!!』

謎の男性達

『ほーらあやれい!!この森を荒らすんだあ!』

謎の男性

『よし、みんな放てえ!』

彼らが放ったのは合成生物達と火炎爆弾。

その多くの上によって森は魔界のような空間になった。

???

『フフ:私の力はすごい、部下達がこんなに興奮しているよ』

一方、村は…

男性

『おーい、火事だー！早く避難しろー！！森が大火事ー！！！！』

村人達

『え？』『うわ！煙だ』『早く避難だ！！』『早く早くー！！』

彼の名は水元 鉄夫《みずもと てつお》。

声の迫力なら村一番で人気がある。

鉄夫

『仕方ない、村長のお家に向かおう』

数分後、黒夜家

ガラガラ…

鉄夫

『おーい村長さん！！火事だす！！』

村長

『おいッ！わしの娘と息子はどうしたのだ！！』

鉄夫

『俺は学校の先生じゃないぞ！人間警報器でもないぞ！』

村長

『フン、わしは娘と息子が来なけりや気が済まん！とつとと出て行け！！』

鉄夫

『じゃあ俺は他の奴らで火事の鎮火と森に住む人の救出作業に向かうからなー！』

村長

『勝手にせいー…ん、ワンちゃんどうした？よーしよし』

一方、エレンは浜辺で横たわっています。ついでに寝てる間にカニがエレンの両手をピースにしました。

エレン

『うう…眠い…あ、寝ちゃってた！私のバカ』

私だったら、なんて事したんだろ。

アリスちゃんが待っているのに…のどか過ぎて寝ちゃった。

でもなんだろう、凄く不吉な予感が…。

エレン

『クンクン…なんだか森が焼けた臭いと、喚いている人達の臭いがする。…これって火事かな？それよりでんわいしで…』

アレ？出ない…

ああ、これはまさか落とした…ううん、その考えはやめよ。

自信が無くなっちゃう。

エレン

『まずい！早く行かなくちや!!ソクラテス、行くよ!!』

ソクラテス

『ニャー!!』

こうして私は、しばらく歩いて小学校に行く為の近道である森へ通る事にしようとしたが…

男性

『見知らぬお嬢ちゃん、この先は火事だから行くんじゃない!』

エレン

『ごめんなさい、いいですか?』

男性

『ダーメーだ!この先は火事と男達とよくわかんねーやつらがいるし、なんと言おうか…よくわからない動物もいるんだ!!』

エレン

『そつかく、通して?』

男性

『あんたは女の子だぞ!自分の命は粗末にするものではない』

エレン

『ソクラテス、このおじさんやつつけて?』

男性

『なんだこの白猫…うわ、ギャー!!』

おじさん、顔面の引つ掻き傷は我慢しててね。

私は今急いでるの…。

鉄夫

『誰がこんな事を…犯人を捕まえたら牢屋に入れてやろう。まあ牢屋なんて作っておいて使った事すらないがな』

男性達

『おーい！助けに来たぞー!!』

鉄夫

『全くなんなんだ本当…ん？なんだあの男は!!』

男性

『おい、そこのお前なにしてん…グアツ!』ドゴオ

謎の男性

『なんだあんたら？ここは俺たちが荒らしてんだ、とつとと帰んな!!』

鉄夫

『そつちが帰れ！ここは俺たちの地元、あんたみたいな変な服装ヤローより何年もこの村にいる!!』

謎の男性

『フッフッフ…おい！バーナード共を放て!!』

謎の男性

『了解だ!』

男性達

『うおっなんだアイツら！火い吹いてキタア!!!』

鉄夫

『うろたえるな！こんなやつら叩きのめせ!』

男性達

『おうつ!』

エレン

『うう、暑い…あちこちが火だらけで倒木もある…魔界なのかしら?』
本当に野生動物がいるかわからない程残酷な森だわ…。

一体、誰が？何をしたんだろう？

そう考えて一歩二歩…あ、なんかいる！野生動物は生きているみたい!!
い!!

エレン

『ねえ、動物さん。ここは火事で危ないよ…えっ』

私が見たのは歪な生物…コメントするとしたら、ハトで口がパイプになっていて、頭の後ろによくわからないタンクが付いている…誰かに改造された鳥だわ。

一体誰がこんな事を?!

エレン

『キャッ!火が!火があ!!』

どうやら、火を吹いてくるみたい。

可哀想…。

エレン

『悪いけど、ごめんね…えらい!』

私は髪にある電気を飛ばして命中させた。

地面に落ちて気絶した。

エレン

『早く行かなきゃまずい…!!ソクラテス、走るわよ!』

謎の男性

『フッフッフ、バーナードを一羽倒したやつもいるのか…だが甘い、実はまだ数十羽もいる。しかし、あのエレンって子かわいいなあ。だが!やつは1000年以上も生きている魔女。俺たちはインカーネイション軍の歩兵に過ぎぬが強いぜ!おい、お前報告しに行け!』

謎の男性

『了解!』

一方…

???

『フフ…私はこういうのが好きなのよ。まるで夏の炎天下の中にあるアイス屋で買ったばかりのアイスクリームを食べるみたいで…ただどのお方から『行くのに相応しいのは雑魚だ』と。大佐格の一人はエレンを拉致するよう放ったのねえ…』

IC歩兵

『大変です！エレンが森を通り、私達森と同じく拠点のある山に…』

???

『おい!!敬語は使うな、腹が立つ』

IC歩兵

『ヒイィ、ごめんなさい！』

???

『ほらさつさと行け。私は森の最深部にある遺跡に向かうのだ。お前は少佐の指示に従って先回りしろ』

IC歩兵

『は、はい〜!』

???

『これだから敬語は大嫌いなんだ…あいつらを思い出す』

森にて奇怪な生物と出会ったエレン。

撃退はしたものの、部下達が動いている今急がないとアリスの命に危険がある。

だが、少佐クラスが率いる兵隊が先回り始める。

白海達は無事だろうか？

次回へ続く。

邪魔なやつら

―通学路―

ザツザツザツザツ…

はあ…はあ…

今私は森を抜けて…畑が周りに多数ある道を走っている…ゲホツ

!!

煙吸つちやつたわ。ソクラテスは大丈夫ね…。

あ、山は手遅れ…かもね。

まあいいわ、アリスちゃんの持つ魔力を頼りに探すわ。

…まずい、学校ら辺に不審者達がいるわ。この人達が事件の関連者
そうね。

IC歩兵A

『はあくアツツ。夏みてえにアチイ。帰ってアイス食いてえぜ』

向こう側は…

IC歩兵B

『学校内に入ったバカ(仲間だけど)、悲鳴が聞こえた後に真っ黒焦げ
のまま帰ってきたな…なんでだ?』

エレン

『あー…この人達をどうにかしないと向こう側の山に行けないっ…』

ソクラテス

『フニヤ〜(敢えて迷子の振りをしてみたらどうかかな?)』

エレン

『いいね、じゃあさっそくやってみるよ!』

バチツ…

IC歩兵A

『なんだ今の音は!!』

エレン

『あ、ごめんなさい…私迷子なの。お兄さん案内して?』

IC歩兵A

『うるさいガキ!今は忙しいんだ!アメあげるからどっか行きな!!』

エレン

『ありがとうお兄さん！えへっ♡』

IC歩兵A

『つたく…（フフ…あのアメの中には睡眠薬を混ぜて作ったのだ。エレンか…ただの10歳のガキだな、全く）』

そして、反対側にササッと行ったエレンは…

エレン

『お兄さん、頑張ってるね！アメあげます』

IC歩兵B

『おっ？気が利くね〜お嬢ちゃん。ありがとね』

エレン

『は〜い♡』

IC歩兵B

『へっ、あのガキのどこが悪いやつだ…気が利くなあ、ペロツ…ZZZ
…』

エレン

『マヌケね、フフ』

IC歩兵A

『おいガキお前!!俺の大好きな相棒に何という仕打ちを…!』

エレン

『あら、ごめんね♡アメは好きじゃないの（うそ）』

IC歩兵A

『や、野郎！例えガキだろうと容赦はしねえ!!』

そういうと悪いやつは銅で出来た長い棒を出したわ。

私に金属なんて自分を傷つけるようなものよ。

IC歩兵A

『くらえいー!!…あり、ありりりり!?ありなまあ〜!!』

エレン

『私の髪の毛は魔法によって帯電するのよ。常人が数秒触るだけで気絶しちゃうのに。よりによって銅は…お気の毒です。行くわよソクラテス』

ーワシタカ山 入り口近くー

エレン

『ううっ、火事っ!?!』

すごい煙だ…。

人間には無理ね、この場所。

…ビビビッ

エレン

『いたっ、魔法の臭いがするわ…ゲホッ!く、苦しい…』

ん、もしかしたら…ううっ煙が酷くて、ゲフッ!…だわ。

じゃなくて…アリスちゃんがいるかもしれない…。

数分後…

エレン

『はあ…はあ…きつい…』

ソクラテスには危ないから煙の危険性がない所に待たせているけど…。

よかつたわ、連れて来なくて…ああ、アリスちゃんいた。

ザツザツ…

エレン

『起きて、アリスちゃん…大丈夫? 痣と砂だらけで可哀想…よいしょ』

アリスちゃん…今大変な事になつてるの…。

火事があちこちに…だから、起きるまで待つてね…。

私は魔女。煙ぐらいで倒れたりなんかしないわ。

早く…行かないと…。

ーワシタカ山 中腹ー

IC歩兵A

『ツェクリ様! あちらからガキが見えますぜ!!』

ツェクリ

『ガツハツハ来たか! 無謀な奴め、俺は相当強いのを知らずにノコノコと来たか!!』

IC歩兵B

『ついでに学校を周回してたバカ2人が倒れてました!』
ツェクリ

『フツ、バカめ。ザコは時間稼ぎすら無理なのか…まあいい、あつちの
テントつぐつすり寝てる奴らを起こしに来い!!』

IC歩兵B

『わかりました!』

エレン

『うつ、ゲホツ!!ここは…どこ?見えないし、苦しいわ…』

このままアリスちゃんが目覚めて煙を吸ったらダメになっちゃう
わ…。

アリスちゃんは学校に置いて私は悪い人をやっけなくちや…。

あ、やつと出口…。

ツェクリ

『出たか…よし、この後小学校に入る筈だあ…おいお前らあ!!降りる
ぜ!!』

IC歩兵達

『おう!!』

ー学校の入り口ー

エレン

『この中に医療用具位あるはずよ』

私はそう言って学校に入る事にした。

本当にあるのかしら?

エレン

『校内は電気を放出していなかったら真っ暗ね…私は好きではない
わ』

ソクラテス

『ニヤ〜(誰もいなくて怖いよ〜)』

エレン

『確かに誰もいないみたいね…』

そうこうしている内に保健室が見つかりました。

エレン

『アリスちゃん…アザやかすり傷がいつぱいだわ。湿ったティッシュで汚れを落とさなきゃ…あら、この村はティッシュがないのね』

あ、なんか落ちた。なんだっけ、えーつとえーと…思い出した！ハ
ンカチだわ〜！

じゃ、水道場へごーごー。

ー水道場ー

エレン

『数時間前ここにいたわ。さて、ハンカチを吸水させようかしら』
ジョロロ…夜中なんだから余計不気味だわ。

向こうからも焦げた臭いがするし。

ついでに羽音…アレ、羽音？にしてはやけに大きいような…。

試しにふり向こう。

エレン

『でかい虫…えっ』

それは、でかい虫ではなく羽が生えたトカゲであった。

まさか、こんなところにも改造された生物が現れるなんて…!!

エレン

『あら、改造生物ね。これからはあなたの事をムシラプトルって呼ぶ
わね…さ、私が相手になろうかしら♡』

ムシラプトル

『ギャアーンツ!!』

エレン

『ぐっ、滑空してからの尻尾うち…中々に痛いわ』

次の瞬間！ムシラプトルがエレンの右脚を噛み付く!!

その痛さに激痛が走るツ!!

エレン

『いたたたたたたたた!!勘弁して〜!!』

う！まずい…血が出てきたわ。

このまんまじゃ痛くて歩きやしないわ。

引きずらないと…ね。

ソクラテス

『フニャーッ!! (よくもエレンにやったな! 許さん!!)』

わ! ソクラテス、跳んだわ!!

さすがは猫ね…!

ムシラプトル

『グアアーツ!!』

ソクラテス

『ニャ… (尻尾は頂いておくよ…)』

ムシラプトルは尻尾を食い千切られて逃げ出した。

はあ…ソクラテスっていつから爬虫類の肉が好きになったのかしら。

もしかして、魔法研究に使うトカゲを盗んでこそそと食べているとか…!

でも、さすがよ! 飛んでいるムシラプトルの尻尾を食い千切られたもの。

エレン

『…そうだ、アリスちゃんの所に戻ろう。脚が凄く痛いけど我慢我慢』
少女待機中…

エレン

『あら、アリスちゃん起きてたの? (じゃあ、濡れたハンカチは意味ないじゃない。汚れ落ちてるし)』

アリス

『うん…よくぼんやりしていてわからないけど、多分、お姉さんに手当として貰ったの。ついでによくわからない…凄く痛いナイフのすり傷も不思議な力で治してくれた。そしてその人はフラツとどこかに去って行ったわ…』

エレン

『そっか…その人すっごいね。でも、よく暗い所でわかったなあ、って思っかな〜私』

アリス

『私にもよくわからなかったわ、あの人…。そういえば明るいわね、エレンの髪の毛…。』

エレン

『そうかな？放電する量増やしたの。こうしたら頭がろうそくに点いた火みたいに明るいでしょう？』

アリス

『うん！えつと…これからはどうするの？』

あ、そうだったー…そういえば、行く途中に明るい部屋が1つあったなあ。

でも、私はアリスちゃん以外の子供に存在を知られたくないからなあ。いや、今の状況を考えるとそれどころじゃないけどね…。

…もしその部屋が安全で人がいたらアリスちゃんにその部屋を預けようかしら。

それより自分の脚を治療しないと…。

エレン

『ちよつと脚を怪我したから待っててね』

アリス

『はぁ～い…』

ー少女治療中ー

エレン

『アリスちゃんお手伝いありがとう♡』

アリス

『はーい！』

エレン

『んじや、アリスちゃん、私の後についてきてね』

アリス

『ん？あ、はい、イエッサー！』

ギシイ、ギシイ…

ー教室 とかげ組ー

妹紅

『はぁ…改造された生物なんて気味が悪いわ。ついでに不審者が攻め

込んできたりもしたし』

教室内はムシラプトルが数匹倒れているのであった！

その教室内にいる人は妹紅と霊夢のみ…。

ガラガラガラ…

エレン

『入るわよ〜』

アリス

『お邪魔しまーす…』

ソクラテス

『ニヤツ（同じくっ）』

妹紅

『お前達は…よく来たな。ろうそくに火を点けて明るくしているんだ。ここで休むといいわ』

エレン

『はい…っと、自己紹介がまだだったわ。私は、エレン。ふわふわエレンよ』

妹紅

『ふっ、変わった女の子ね。私は藤原妹紅よ。お前の頭から電気が出てるけど、私と同じか？』

エレン

『ま、当たり前よ。私は魔法が使える人間だわ。いや、人間じゃないのよね…だって…アレ、何年目だっけ忘れたな…』

妹紅

『ま、それ程生きているんじゃない？あ、私はね…火を生み出す事が出来るんだ。ま、犯人として疑われないようにここで引き隠っている訳だが…異様に気味の悪い生物どもが攻めてくるわ。ま、私は火を使わずに格闘で行きましたわ』

エレン

『大変、ね』

妹紅

『で、あっちのベッドに寝ているのが…』

アリス

『大変よ！悪い人達が攻めて来たわ!!』

妹紅

『何?!1時間位前にバカっぽいやつが攻めて来たが、私の火で燃やして帰らせたが…ってエレン!』

ドタドタバタ…

アリス

『あ、先生…』

―校庭―

エレン

『さて…悪党達に刺激を与える時間がきたわよ。…いるんでしょ、自然を荒らしている人達がそこに』

ツエクリ

『お前が歩兵を倒したガキだなあ…へへへッ』

IC歩兵

『おっと、俺たちも忘れてはいないようだな?』

何コレ…タダ者ではないわ。

しかも中央のやつは大柄で鎧も歩兵より豪華だわ。

エレン

『何グズグズしてるのよ。かかって来な』

IC歩兵達

『おりゃー!てりゃー!!』

エレン

『はい、引つかかった〜!』

IC歩兵達

『あぎゃーッ!!』

ブスッ

残るはでっかい人だけよ。覚悟決めな。

ツエクリ

『フッフウゝ俺様の持つ斧はあいつらの棒とは比較にならないぜ？』

エレン

『ふくん、来なよ』

ズドン!!鉄製の斧はエレンに目掛けて降りたが…

エレン

『はあ…危ないわね、あんた。私は女子供に含みますよ？』

ツエクリ

『うるせえ！貴様を始末して本部に送ってアイスをいっぱい食べるんだ俺は!!』

妹紅

『あら、肝っ玉はでかいのね。食べてもさぞ硬くて食べそうもないわ』

ツエクリ

『なんだテメーは!!』

妹紅

『お前に名乗るほどじゃない。あなたみたいな自然荒らしは大嫌いだわ。エレンちゃん、私に代わってくれるかしら？』

エレン

『あ、はい…』

妹紅

『さ、来なよ大男。外したら後悔するわよ』

ツエクリ

『舐めやがつてゝ！おりゃあ!!』

ズドン!!からぶりー!

スパアーツ!!

ツエクリの背後に妹紅の燃えた蹴りがヒット!

ツエクリ

『いつでえゝ!!貴様ア、何をしたあ!!!』

妹紅

『鈍器なんかで来るのが悪いのよ』

ツエクリ

『武器なんかいらねえ！コテンパンにしてやるう!!』

妹紅の腕に炎が燃え盛る…

妹紅

『燃え尽きろオーーツツツ!!』

その百発百中のラツシユは鉄製の鎧を主に命中したツ！

ツエクリ

『今のタコ殴り、子供みてえだぜ！次は俺のば…う、あつ、あじい…!!』

妹紅

『敢えて鎧に殴ったのは、鉄の熱さで悶絶する様が見たいからよ』

ツエクリ

『うああ、アチいい!!覚えてろよガキ！上の方にチクってやるう』

!!』

妹紅

『ガキと言う程の年齢じゃないよ私』

エレン

『あのく、この斧どうする?』

妹紅

『ああ、コレ?こんなの私達が住む場所に似合わない斧ね。木こりが使う斧の方が十分見栄えがあるわ』

エレン

『んじゃ、ポイ。逃げ遅れた悪いやつ1人は縄でちよいキツめのぐるぐる巻きにしましょ♡』

妹紅

『そーだな!…ん、雨か?』

エレン

『雨ね。これで森の火は消えて行くわ』

妹紅

『よっしゃ!これで安心!!じゃ、悪党達を持って教室に行つて縛るか』

エレン

『だね!あく…なんだか疲れたわあ』

こうして、悪い奴らを追い払った女戦士達は休息に向かう…。

この雨はザーザー降り続き、森の火も消えて行くだろう…。
次回へ続く。

悪党は哭く

場所、村長の家にて…

村長

『大雨が降っている…子供達は一向に帰って来ないのに何故お前は一人で帰って来た!!』

校長

『なんだ、わしに文句をいーやがって。わしはこれでも命からがらと逃げて来たんじゃないぞ!!』

村長

『バカモノ〜！わしの大切な息子と娘を見殺しにするつもりかッ!!』

校長

『あー…わしや悪いことしてしまったべ…悪い』

村長

『そうだ、よくわかつとる。お前とは長年の旧友だからしつかりせい!!』

校長

『ああ…これからあんたはどーする?』

村長

『わしの大事な息子と娘を妻と一緒に捜す。他のガキは知らん!!お前はここに残って家事でもしてなさい』

校長

『わかつた…』

どこからともなく、妻が現れた…

村長

『さあ、行くか』

妻

『はい、バカ息子とかわいい娘を捜しに行きましょうね』

村長の名は元輝（げんき）。村長で、刀を武器にしている。

妻の名は黒子（くろこ）。生まれて大方鬪いに身を投じた事がないものの、物探しが得意。

そして、両親から一転変わって…

ーワシタカ山 山頂ー

???

『貴方達！何故負けたのです。信じていた私がショックです…さらに！一人足りないじゃないですか』

ツエクリ

『ハッ！お許しくださいませ夢子（ゆめこ）大佐!!』

夢子

『ほう…私に許せと申しますか。良いでしょう。ただし、アリスを捕らえたらですよ』

アリス…私を創造してくださった神様が作ったヒト…。

成長して反抗期を迎え、神様に躊躇なき闘いをして勝利し魔界から逃げた罪深き人間…。

軍に入る事で、捕らえる事も出来るなんてなんと良い物…。

だが、神様はこんなことをしてお許しになされるのだろうか…？

IC歩兵

『じよ、冗談じゃねえ！アリスとは違う金髪のがきが邪魔をしに…』

夢子

『もう一度よろしいですか？』

IC歩兵

『ア…アリスとは違う金髪のがきが邪魔をしに…』

金髪のがき…！思い出した、あの忌々しいエレンだ!!

幻想郷にいなかったせいで捕らえる事が出来なかった魔女だ!!

IC歩兵

『夢子大佐…？』

夢子

『グ、ヌヌ…なあにイイイ〜〜?! エレンかあ!! アイツめ…アイツがいるせいで邪魔なのだ!!!』

IC歩兵達

『ヒイイ〜!!』

ツエクリ

『夢子大佐が御乱心になされた！早く逃げろー!!』

夢子

『逃すか!!』ヒュイツ!!

私は敢えてあなた達に大柄のナイフを使用するのはあなた達が弱いからよ。

このナイフには毒素を発生させる呪文を掛けてあるから、少しでもかすれば気絶するほどの激痛がするよ。

IC歩兵達

『あああああいでええええええええ!!バタン』

ツエクリ

『ヒィィィダアアア!!俺はエレンとか言うガキに返り討ちしに行くんだよ…助けて!!』

夢子

『ダメだ、私から逃げた後はどうせ仕事放棄するんでしょ?全く…給料も上げようとしたのになあ、アイスも沢山あげようと思ったのにガツカリだよ』

ツエクリ

『ご、御名答ですアハハハハハ!!た、助けて!!』

夢子

『少佐失格ね、食らえ!!』ズザツ!!

ツエクリ

『たすげばあ!!』

夢子

『バカアね♡私の蹴り術は強いだよ。ま、あなた達はここら辺で放置しておくわ。毒は数日で治る程に薄めてあるからこの村ですつと反省してなさい』

さて、復讐しに…

IC歩兵

『大変です！只今解放された改造生物1004が大暴れして森の木々が薙ぎ倒されているという報告が参りました!!』

夢子

『それは大変ですね。そしたらそいつは失敗作なので用が済んだら愚かなる裏切り者達と共に置いて行きましょう』

IC歩兵

『かしくまりました。では、他の改造生物である1002と1003はどんなされますか?』

夢子

『回収しておきなさい。改造生物達にはマイクロチップを埋め込んであります。女王様は自作の改造生物にご興味をお持ちですので』

改造生物：他の人は悪趣味と言うけれど私的には魅力的だわ。

IC歩兵

『了解です!』

夢子

『ナイフでは勝てなさそうだし短剣を使おうかしら。ついでにこの短剣には絶縁性の魔法をかけときましょ』

しかし：大雨がひどいわ。

これのせいで火災がなくなっただわ。

そういえば順調に進んでるのかな?

私より格が上、年齢がとんでもないくらい上で、実力も軍の中では三番手の友人：エリス。

帰ったらカルメ焼きでも作ろうかしら。

さて、行きますか。

夢子

『と、その前に：ケチャップ!おやつは干し肉にケチャップをたっぷり塗りたくって：あら、溢れちゃったわ。まあ脅しに使えそうね』

んん〜パクりしましょう：パク、m g m g…

夢子

『ギャアアアア美味しいイイイイイ!!!魔界産のトマトで作られた魔ケチャップと魔牛の肉を干して作られた魔ビーフジャーキーと組み

合わせた奴は美味しいいい！何個食つても飽きないもんね!!私たら天才!!』

ハア：ハアア：美味すぎたわ。

ケチャップ拭くのめんどくさいし、まあいつか。

ウフフ：今の私はエレンをぐさぐさのミシミシに出来るわ！

フッフッフ：覚悟するが良いね!!

ー小学校 とかげ組ー

エレン

『さて、あんたの目的は何かしら？答えによつてはビリビリよ』

IC歩兵

『そ、そんなのお前みたいなガキに言いたくない!』

エレン

『お仕置きよ♡』

IC歩兵

『ブイリブイリブイリ!!：うぐつ、イタタタタ!!』

エレン

『じゃあ言うかな？私だつてあなたみたいなのひどい女の子じゃないよ

〜?』

妹紅

(お嬢ちゃん、あなただつてひどいじゃない)

IC歩兵

『んじゃあ、言いますう〜!俺はインカーネーション軍という集団に種属していて…』

エレン

『それで?』

IC歩兵

『そう、歩兵ですう!歩兵ですからああああ〜!!!それでえ〜!!』

エレン

『なにになに?』

IC歩兵

『夢子大佐にという方に命令されて、ツェクリ少佐と仲間達で行方不

明になった幻想郷という異世界の人間を探しにという訳でここら辺を調査しに来たのだアツ！そ、それで同時進行で探しているお前を見つけたからここまで追ってきたのだ!!』

もしかして…私の事が好きだったりして！

イケメンだったらきやー！嬉しい!!

エレン

『あら、私っいたらいつから人気者になったのかしら♡ねえ、あなたの軍ってイケメンはいるのかしら?』

IC歩兵

『し、知らねえ！大佐全員女の子だし、中佐はそうとは限らないが少佐はゴリゴリの漢ばかりだぞ!』

エレン

『あら、ガツカリだわ。私は魔女で人間より成長が100倍遅いの。100年経って1歳になるようなものだよ。それ故に不気味がられてるから彼氏はいないの。だからいつも恋してるんだよね。ああ、軍に白馬の王子さまがいたらなあ…ウフフ♡』

IC歩兵

『そ、そうかい…お前かわいいのにねえ』

エレン

『ありがとう♡』

IC歩兵

『ああ…次はどうするんだ?』

エレン

『村人達と協力して行方不明になった子供達の捜査よ』

今の状況だと子供が2人…その内一人は寝ているわ…。

IC歩兵

『おい、外は暗くて大雨が降っているんだぞ！しかも俺の仲間はお前達を敵対しているし、何より…』

エレン

『何より?』

IC歩兵

『とんでもない改造生物を放つのを聞いたんだ！だからもうガキ共も流石に生きれまい!!』

エレン

『なんだって！それはいけないわ、早く村人達に知らせに行かないと!!』ドタバタ…

妹紅

『おいまた!?全く、私も行くしかないわ。アリスちゃん、おねんねしてる霊夢ちゃんとその悪い奴を見張ってくれるか?』

アリス

『あ、うん…わかった』

妹紅

『じゃあ行つてきます!!』ドタバタ…

ー村 広場ー

エレン

『みんな、集まってくれてありがとう…こんな大雨の中なのに、ありがとう…』

妹紅

『さて、本題に入るよ…本日の事件で児童達が行方不明になった。1人の児童は私と一緒にいたから無事なもので、もう一人はそこにいるエレンちゃんが見つけた。それ以外の児童はパニックになりどこかに行った。これは私の責任だ、許してくれ…』

村人達

『いやいや、落ち込まないでくださいな』

『先生が暗くなったら児童も暗くなっちゃうよ』

『子供達は見つけますから』

妹紅

『あ、ありがとうございます…』

鉄夫

『おうお嬢ちゃん！俺等がみんなを引導して捜すからよお〜！安心せいつ!!おい、みんな行くかーつ!!』

村人達

『おおーっ!!!』

と、村人達は村に残って守る側と捜す側で分かれた。
エレンと妹紅は探す側となり、村人達よりもっと先に行く事にした。

夢子は一体何をしているのだろうか…。

次回へ続く。

悪夢は舞い降りた

ーなぞのばしょー

アリス

『ここはどこかしら…ん、私は何故ここにいるんだろう…』

アリスよ。アリス・マーガトロイド。

今いる場所だけど、ここはなんだかよくわからない。

…いや、周りを見渡してわかった事がある。

ここは…魔界ね。私が育った場所であり、いたくない場所だ。

よくわからないけど道なりに進みましょう。

アリス

『ああ、疲れたわ…喉渴いたし、水飲みましょ』

そうこうして数分後に着いた…。

夢子

『アリス、あのお方に無礼な事をしたのを懺悔しになされるのですか？』

アリス

『…へえ？どうしたの、夢子…アレ、夢子っていう名前なの、あなた…
というか校舎で見たことあるわ』

夢子

『…アリス、嫌な事を忘れて…ついには私すらも忘れましたか』

アリス

『な…何を言ってるの？あなたそこをどいてくれるかしら？いや、無理には言わないが…』

夢子

『本当に忘れたとは…まあいいわ、さっさと行きなさい。あなたの顔
なんて見たくもないわ』

アリス

『ムスツひどいわね』

なんだったんだらうあのメイド。

ナイフで切りに来ないといいんだけど。

ーさらに数分後ー

アリス

『ここがどこなのかわからないけど…まあ深い所かな。適当だけど』

ここは正直魔界だろうけど、ここは覚えがない。

疲れてきたし、最深部まで行ったらそこで休もう…。

しかし、夢子らしき人物が言っていた『あのお方』とは一体…。

創造主

『あら、また来たのね。もう見たくないわ、あなたの醜い存在が』

アリス

『初対面で酷くない？それにあなたとはまだ深く関わってないわ』

創造主

『ほごくな。あなたは以前私に対して暴行を加えた。それも人形を操って…私はあなたにそんな教育をした事がないわ』

アリス

『人形が何よ！私が持つてる訳…あ、これのことね!!』

創造主

『自分で持つておいて忘れるなんて…それでも人間ですか？』

アリス

『人間よ。あなたも人間？』

創造主

『神よ。あなたみたいな自律人形とは格が違うの』

アリス

『そうなのね…じゃ、じゃあ私はこのへんで…』

創造主

『待ちなさい。あなたは私に暴行を加えた、よって追放よ。もう二度と来ないでちょうだい』

アリス

『そ、そう…なんだかよくわからないけどごめんなさい…』

スタツ…スタツ…

夢子

『あらあらあらああくらああら。追放されちやった、魔界から』

アリス

『あ、さっきの…』

夢子

『もうどっか行け！我はインカーネイション軍に種属する大佐です！！
エレンの事が大嫌いだ！！あの時はよくもやったな！！ガッ、ガッ、ガア
アアア！！』

!?な、何!?

アリス

『う、うわああ!!に、逃げなきやー!』

夢子

『逃すか!!』ヒュイツ

ズドン!!

アリス

『うああつ、腕が…腕があ!ひつ、痛い…うつ、ううう…エレン助け
て…………』

うあああああ…

アリス

『はあ、はあ…はあ…夢かあ…あれ、あなたは…』

???

『やっとお目覚めになったのね』

アリス

『あの時はありがとうございます…そういえば、お名前は…』

クロスベリー

『クロスベリーと呼んでくれたら嬉しいわ。みんなから見たら10代中盤の女の子に見えるけど21歳よ』

アリス

『そうですか…私はアリス・マーガトロイドよ』

クロスベリー

『そっか…そうそう、あなたの消し去られた記憶を蘇らせたけど…すごい汗。嫌な記憶も思い出したのかしら』

アリス

『記憶、失っていたんだ…だけど何故身体が幼いの？』

クロスベリー

『一人だけに教えるのはめんどくさいからまた後で』

アリス

『ケチィ〜』

クロスベリー

『ごめんね。霊夢にも記憶は蘇らせたわ。懐かしいわ霊夢』

えっ、霊夢と関わりあるの？

アリス

『ま、ともかく…あなたはインカーネイション軍とかいう集団の一人？』

クロスベリー

『正解よ。まあ私は唯一裏切りが出来た存在かな。なんとか洗脳を振

りほどいたからね』

アリス

『洗脳…？』

クロスベリー

『そうよ、軍のリーダーと一部の人以上は洗脳されているわ』

洗脳、ね…まるで人形。

クロスベリー

『そろそろ軍は引き上がるわ。たしか…この村の近くにある森の中にある遺跡内には秘宝があるのよ』

アリス

『秘宝…？』

クロスベリー

『そうよ。そのシリーズの秘宝は7つあって、とある所に全てを捧げ、最後に捧げた者の願いが1つ叶う…正に危険で魅力のある秘宝、その名も「インカーネイション・ミュージカル」…私達はIMアイテムと呼んでいるわ』

インカーネイション…あ、軍もその名前ね。

アリス

『危険…だね』

クロスベリー

『まあね。場合によっては最強の存在となって大暴れ出来るみたいだしね』

アリス

『う〜んわかんない…よ』

クロスベリー

『だね。軍のリーダーが何を叶えるかさっぱりだわ』

アリス

『確かに…あ、霊夢が起きたわ』

霊夢…ああ、今回の異変は嫌でも協力しなきゃいけないのかな。

あと魔理沙とも。エレンは命の恩人だからまあマシだけど。

クロスベリィ

『おはよう霊夢、そして久しぶりね』

霊夢

『んう…おはよ…あ、えーと…ここは教室ね…』

クロスベリィ

『うん、教室。あなたが寝てる間に色んなことが起きたみたいだけど
残骸は私が片付けたわ』

霊夢

『そう…ってあなたは…!』

クロスベリィ

『お久しぶりね。名前はあなたも知っていよう』

霊夢

『うん知っているわ。えっと…誰だっけ』

クロスベリィ

『あら、忘れちゃったのね。じゃあ嘘じゃん』

霊夢

『しかし…記憶を失われ、乳児にまで退化されるとは…なんでなの?』

クロスベリィ

『めんどくさく…』

ボカツ!!

霊夢

『ひどいわねー!』

クロスベリィ

『ちよ、いた…』

ボカツ!!ボカツ!!

アリス

『答えてよ〜!』

クロスベリィ

『うう〜痛いから勘弁してえ〜』

バキツ!! (頭にイスで殴られた)

クロスベリー

『イツ!!』

霊夢

『こいつは放っておいてどっか行きましょ♡』

アリス

『はあ…あなたと組む気なんてないわ。だけど心配だからついて行くわ』

霊夢はあんまり好きじゃないんだよね。

まあ今は仕方ないけど。

霊夢

『そ、そうかい。雨は止んでるけど外の門が暗くてどこだかわかんない…って、赤い傘がある』

アリス

『クロスベリーの私物かしら?』

霊夢

『ま、お荷物だから置いときましたよ』

アリス

『森、通りたく…』

霊夢

『さあ、村まで帰るわよ!』

えっ、大変だし危険だよおく。

それに村ってどこだっけ??

アリス

『うえくん、霊夢のバカ!』

霊夢

『バカじゃないもん♡』

アリス

『し、仕方ないわね。行くわよ!』

数分後…

ー村 大広場ー

エレン

『アリスちゃん無事だったのね！放置しててごめんね…』

アリス

『大丈夫だよ！私強いもん』

エレン

『よしよし…』

アリス

『えへへ…』

霊夢

『白海！大丈夫、怪我はない…？』

白海

『霊夢ちゃん…あはは、大丈夫じゃないよ』

霊夢

『白海のお兄ちゃんは大丈夫？』

白海

『怪我はないけど…怒ってるよ。気をつけて…あ、他のみんなはいるけど…魔理沙ちゃんがない…』

霊夢

『ま、魔理沙!?そんな…魔理沙…』

次回へ続く

ミンナニナギツ！改造生物の爪痕！！

今から数時間前…

エレン

『うー雨がひどいわあ…電気が飛び散るわ』

妹紅

『我慢よ我慢。私だって火を生み出せないんだし』

エレン

『まあ〜ね。敵もあの鎧や武器が錆びちやいけないと思うから引つ込んでるはずよ』

雨って憂鬱だわ〜。ソクラテスついてきちゃってるし。

ああ〜後で臭くなっちゃうよ。

ソクラテス

『ニヤニヤ！（雨は本当に憂鬱ですな！）』

エレン

『そよね〜本当』

妹紅

『あなた…猫と話してるのかい？ちよい不気味なんだが…』

エレン

『あ、気にしないで！私ね〜魔法が使える魔女さんなの!!』

妹紅

『ま、魔女…すごいわね』

魔法の欠点なんか…

・大人になるのにすごく時間がかかるし

・気味悪がられるし

・リンゴをあげたら『お嬢さん、そのリンゴ食ってみてよ』って言

われて食べてくれないし

・忘れちゃう

・恋は実らない

という欠点があるけど…逆をあげると

・魔法（おもに電気〜）が使える！

- ・若さがずーっと保てる！
 - ・人気もたくさんある！
 - ・かわいい！天才！最強！
 - ・私のことが好きな人を探せるチャンス！
- うひゃく！これは素敵！！
私考える才能あるかも♡

妹紅

『そんなリングゴよりも紅い頬をした顔でニッコリしないでよ、微笑ましくて元気出しすぎてすごいことになっちゃうよ私』

エレン

『そうかなくまあともかくごーごー』

妹紅

『うう、元気な魔女さんだなく…』

ー神社ー

ここは神社ね。

あー、えつと…ちっさいわね。

ある異世界に行った時にあつた神社以下にちっちやいわ。

名前、忘れちゃったけどね。

神主さん

『そこのお嬢ちゃん藤原家の娘さん。君達二人でどこに行くのだい』

妹紅

『あら、清龍(せいりゅう)さんじゃないですか。霊夢ちゃんのお父さんの…』

霊夢…神社…アレ、なんか聞いた事あるよな…

エレン

『私は、エレン。ふわふわエレンよ』

清龍

『(ふわふわ：?)初めまして。私は博麗清龍と申す。みんなは搜索をしているらしく、もしかしたら私の娘かと思つて…』

博麗：霊夢：なんか変なネーミングセンス。

妹紅

『娘さんなら小学校で待つてます。つて子供だけだあ〜：ガーン』

清龍

『それは本当か?!でも妻からは足手まといは家でお留守してなさいと言われたんだ!ひどいなあ。でも霊夢は大丈夫だ、術をたっぷり叩き込んだから、変なやつ一人位は倒せると思う：多分』

妹紅

『アリスちゃんもいるわよ』

清龍

『ウツズさんの娘か。ウツズさんは村人から根強い人気があるマリアリ・マジカル☆ガールズの師匠であり、めっちゃ強魔法使いだ。

魔理沙ちゃんとアリスちゃんはああ見えて実力が高いんだよなあ』

私：エレンは魔女だけど〜。

ま、言うのはやめときましょ。

エレン

『ほおくん…じゃあ、おじさん、そろそろ行くね!』

清龍

『うむ。健闘…いや、見つかることを祈る』

ーウインド森ー

エレン

『森の中にうじゃうじゃです』

男性

『妹紅ちゃん。この微妙に汚いけどわりと美味しいクッキーを役立ててくれ』

妹紅

『ん、クッキー焼きの鶏夫（とりお）じいさん。クッキーありがとうございます！
ございます！』

もこたんはクッキーを5枚いただいた！

微妙に汚いけどわりと美味しい。

煮たり焼いたら美味しくありません。

エレン

『私にもちよーだい！』

鶏夫

『あ、広場でわしの息子と話していた女の子じゃな？ほら、役立ててくれ』

やったね。私も5枚頂いたよ。

クッキー大好き！

ソクラテスはクッキー食べれないけど。

ソクラテス

『フニャアアア…（僕にもクッキーが無いの？）』

鶏夫

『猫にはやらんぞ!!』

ソクラテス

『ニヤッ！（ケチ！）』

ソクラテス、そこは我慢よ。

エレン

『私は行くね。ありがと、おじちゃん！』

妹紅

『ありがとうございます』

鶏夫

『息子をよろしくな。あと、クッキーなくなったおいでな』

ふわもこ

『はぁーい！』

エレン

『M G M G、クッキー甘くて美味しい♡』

妹紅

『こりゃ美味しい。何枚でも行けちゃうね』

そうこうしているうちになにやら人が集まっている…

咲夜

『うゝ…邪魔ね、これ。大木が倒れているわ…』

エレン

『お困りだね!』

咲夜

『ひゃっ、何です?』

妹紅

『咲夜ちゃんここにいたのね…他のみんなは?』

咲夜

『あ、先生!はぐれちゃいました。みんな錯乱状態だったので…私もです』

妹紅

『あら、まあ…で?』

咲夜

『この大木がなぎ倒されていて通れないんです。しかも明らかに仕業は人間では無い跡です!』

たしかに…こんな大木を倒すなんて数時間かかるのに、誰がやったんだろう?』

妹紅

『あそこにいるマツチヨマン3人組にどかしてもらいましょ』

咲夜

『そうだね、うちのパパも今ここにいますしね。無料で泊まれる宿屋さ
んで働いているけど、割と身体動かすから強いよ!!』

エレン

『わあ、すっごい』

咲夜

『パパ、この木かたしといて?』

咲夜のお父さん

『あいよ、任せとぎー!』

鉄夫

『よーし、力(りき)がかわいい娘から依頼を受け取ったし、俺らもやるぞ!!』

漢達

『おーう!!』

土砂降りの如き雨の中でも凄いわね〜…

咲夜

『うちはどうすればいい〜?』

妹紅

『村に戻ってね。でも大丈夫かな?』

咲夜

『平気!うち一人で行けるよ!!』

エレン

『心配だからソクラテス送るよ。ソクラテス、この娘の護衛お願いね』

ソクラテス

『ニヤッ!(わかりました!)』

咲夜

『猫ちゃんは心強いかなあ〜…ありがとう!』

妹紅

『よかった』

私よりもつと歳下で幼いのに…すごいね!

私は幼い頃はこんな感じじゃなかったかなあ〜…今でも幼いつて言われるけどね。

私達と村人は分かれ道の片方を探索しに行くべきのようだ。

そして…

妹紅

『洞窟…か。村人たちは立ち入り禁止だが、入ってみよう』

エレン

『えっ、いいの?』

妹紅

『立ち入り禁止用に積んだ木箱共がバラバラになってるし、誰か入ってたんだろう』

んじゃ、行くしか無いね。

他の道は村人達が探索する際に使ってるしね。

少女侵入中…

エレン

『ここなら雨水が入ってこないわ。魔法、使おうかしら』

妹紅

『うちの炎の力で照らすわ。あ、やっぱ二人共使いましょ』

エレン

『そうね〜』

ばちばちのぱちぱちのハーモニー…耳にくる〜。

周り見渡せれるけど、先は真っ暗ね…いや、一点の光がある。

妹紅

『走るっ?』

エレン

『ハーハーハー』

少女走行中…

あ、外に出れました。

雨も止んだけど…嫌な予感。

妹紅

『こんな所があったとは…しかも遺跡…?』

エレン

『うわっ、多くのドアがついた鉄の塊…じゃなくて乗り物があるわ!!』

妹紅

『インカーネーション軍という連中共ね…』

IC歩兵A

『なあ、もうあの化け物は放っておこうぜ』

IC歩兵B

『いや、あいつ回収しないと村の人が…』

IC歩兵A

『お前、善人か！』

IC歩兵B

『あ？そうか？』

エレン

『何やっているんだ…しかもなんかよくわからない台の上に機械と融合した…イノシシ?!』

IC歩兵A

『うわっ！なんだガキ!!おい、起動させろ!!』

IC歩兵B

『了解!』

そういうと歩兵はピコピコと機械を操作してイノシシに電気を送り込んだ…。

むごい…なんて人たちの…!

IC歩兵A

『トンスラするぜ!』

IC歩兵B

『バアイバアイ!』

妹紅

『待ちなさい!…つたく、もう…』…ピピッピ『ん?何か音が…』

悪い奴ら遺跡に逃げちゃった。

あれ、イノシシが起き上がった…。

いや、様子が異様だ…!

エレン

『気をつけて、来るよ…』

イノシシ…？

『ブフウウウ、ブヒイイイ…！』

エレン

『オーマイポーク…名付けよう、デックスアーメニーね』

妹紅

『よ、余裕?!あなた何者だい!!』

エレン

『魔女』

妹紅

『ああ、そうだった…うわっ!』

デックスアーメニーは妹紅に向かって突撃!

見事背後にあつた乗り物はボロボロになった。

エレン

『うわぁ!強い…』

妹紅

『まずいな…くらえっ!』

妹紅はデックスアーメニーに大量の火花をぶちまけた。

毛は焦げて余計に臭くなった。

デックスアーメニー

『ブヒイイ!ブヒイイ!!』

まずい!興奮してしまった!鼻からはまるで列車のごとく蒸気を

出している…

このままだと…まずい!!

妹紅

『うああ…まずい、なんてやつだ!』

エレン

『早く離れないと!』

そして…

ドンダン!! バァン! ガジャン!! ドゴンドゴオ!!!

暴走を始めた。

インカーネイション軍が所持しているであろう乗り物は数台大破し…

妹紅

『うぐ、こっちくんない!』

エレン

『仕方ない…使う気になれないけど…これでもくらえっく!』
ビリビリ攻撃よ!

機械は急増な電力に弱い気がする!!

デックスアーメニー

『ブイイー! ブイイイ、ブウウ!!』ボンツ

上手く行っただわ!

…えっ、まだなの?

エレン

『化け物なのかしら!? でもなんだかさつきより暴走気味だわ!!』

妹紅

『早く…グアツ!』

あ、藤原さんの太ももに牙が…

まずいつ!

妹紅

『フツ』ブオオ…

妹紅の太ももが炎上した…

デックスアーメニー

『ブヒイイイイ!! ブイイイ!!』

妹紅

『これでどうだ!』

そうとうと妹紅は…!

ドゴオオオオオ!!!

妹紅

『倒したな…』

エレン

『ええ…脅威だったわ。汗びっしより』

妹紅

『遺跡は入る気になれないし、明日に行こう』

エレン

『そうね…あ、ハトだ。伝書バトみたいね』

妹紅

『広場に集まれ…だって』

エレン

『行きますか…』

妹紅

『行こう…』

夢子

『ふんっ、中々やるな、1000年以上をも生きる魔女と元蓬萊人…遅かったか』

シユン…ストツ

夢子

『たった今私は崖から華麗に落ちましたわ』

IC歩兵A

『た、大佐!?!何故ここに…』

夢子

『脱走した犬を捕まえに。うん、あなたらよ』

IC歩兵A

『ふへえ?!バレちまつてるのかよお?!』

夢子

『バレバレですよ?しかも女王様愛玩のペットを連れ出すとは…あ

あ、間に合っていたら良いものを…無残にやられていますわ』

IC歩兵B

『大佐、俺は悪くないんで無給にはしないでください〜』

IC歩兵A

『なに、俺を見捨てる気かあーッ！』

バカバカしい…二人でやってなさい。

あと、クビにするようエリスに言っとくから。

あの倒れたペットは私が回収して埋葬させましょう…全く、ひどいわ。

ー村 大広場ー

エレン

『藤原さん…傷深いんだから無理しないで』

妹紅

『15歳の女の子だって頑張れるから…』

エレン

『集会どうする？』

妹紅

『大丈夫だから参加するわ』

エレン

『無理は禁物です』

アリス

『ふう…あ、エレン姉ちゃん！』

エレン

『アリスちゃん無事だったのね！放置しててごめんね…』

アリス

『大丈夫だよ！私強いもん』

エレン

『よしよし…』

アリス

『えへへ…』

霊夢

『白海！大丈夫、怪我はない…？』

白海

『霊夢ちゃん…あはは、大丈夫じゃないよ』

霊夢

『白海のお兄ちゃんは大丈夫？』

白海

『怪我はないけど…怒ってるよ。気をつけて…あ、他のみんなはいるけど…魔理沙ちゃんがない…』

霊夢

『ま、魔理沙!?そんな…魔理沙…』

魔理沙ちゃんはいなくなっ、お兄ちゃんは怒っている。

私のせいだよ、きつと…

つらい…

鉄夫

『よし、みんな集まったな。良い知らせと悪い知らせがある…どつちから聞きたい…？』

…良い知らせからの方がいいよ。

鉄夫

『いや、良い知らせからした方が良さだろう…道を塞いでいた倒木をどかした先にある学校や川辺の道が開通し、子供達を救出した事、森を荒らした集団の一人を捕らえる事が出来た…これは良い結果であろう』

霊夢ちゃん達に会えて良かった。

鉄夫

『悪い知らせは………凄まじい雄叫びが聞こえた所に行ったのだ……』

霊夢

『ああ、聞いたことあるわね……心臓止まるかと思つたわ』

鉄夫

『そしたら……そこには……そこには……!!』

鉄夫

『白海ちゃんと光影くんの両親が動かなくなっていた』

……!!

白海

『ママ……パパ……!?!』

光影

『くそっ……両親を返せ……おい……両親を返せえ!!』

鉄夫

『光影くん、しっかりしてくれ……両親もその怪物と死闘を繰り広げたのだ……』

咲夜

『光影さん、お気を確かに……痛っ!』

咲夜は光影に殴られた。

ただ、止めに行つただけなのに。

妹紅

『おい、歳下に何を…グツ!!』

妹紅は光影に蹴りを受けた。

治めようとしただけなのに。

清龍

『やめなさい、気持ちわかるが…妹の前だぞ!こんな兄を見て妹は悲しむ!!』

そう言い清龍は向かったが吹き飛ばされる。

鉄夫

『いい加減にしろ!このままだと両親も安心せず天に行けないぞ!!』

光影

『うるせえ!黙れおっさん!!お前ごときなんか俺をなんも理解しちやいねえ!!』

エレン

(今からやる事許してね…これ以上やるとみんなが怪我しちゃう…)

光影はエレンの電気によって気絶させられた。

そして騒動は収まった。

見えない試験は、誰にだってあるのです。それを越えてこそ勇者なのです。

悲しみの漁村

夜は明け、留置所にて…

昨日の夜に暴れた光影が収容されていた。

罪状は暴行の罪。

懲役はゆつくりしたなら…だとか。

鉄夫

『全く…君は記念すべき留置所の囚人第1号だぞ、おめでどう……？』

まあともかく！昨日は本当に残念だな…あの後鶯谷導（おうこくどう）さんが墓を作ってくれた。

やはり…村長だから、みんな集まっているよ。ある人は悲しみ、ある人は泣いていた。またある人は怒りも抱いていた…。

君の妹であり村長の娘でもある白海ちゃんもいる。涙は流さなかつたけど、嘆いていたよ。

あと、魔理沙ちゃんの事だが…他の仲間が墓参りを終わり次第俺達も捜索に向かう。

しばらくここで休んでいるが良い、駄菓子も駄菓子屋の婆さんが君に用意してくれたぜ』

光影

『ママ、カブトムシ取れたよ！』

黒子

『あらまあ、カブトムシね。よしよし、物置にカゴあるから取りに行つてね』

光影

『あら、こんにちは。あなたは村長の息子さん？かわいいね♡』

光影

『こんにちはお姉さん！あ、えっと…誰？』

お姉さん

『お姉さんはねー…ひみつっ！あなたのためにおやつを台の上に置いたよ！』

光影

『ありがとう、お姉さん！』

お姉さん

『はーい！』

う、美しいなあ…。あれ、どこかで見たことあるような…ま、いつか。

とりあえず家に入ろう、中が心配だ。

あれ、いつの間にか今の俺に成長してる。

まあいい、中に…

なんだよこれ。

母ちゃん、父ちゃん、白海、霊夢、魔理沙、先生…

光影

『おい…なんでみんな寝ているんだよ!!まだ昼だぜ!!』

…静寂が不穏を返事をした

光影

『おい、みんな…なんで寝ているんだよ…白海、起きろ！おい…』
触ってみたら皮膚は柔らかいけど体が硬い。

気のせいかな、冷たい…

嘘だろ…

光影

『医者と呼ばなきや！』

早く、外へ…

ガチャン…

お姉さん

『ねえ、今どんな気持ちかな？』

光影

『悪いけど、そこいい…！今、みんなが大変なんだ!!』

お姉さん

『教えてあげるよ…私の名前は…』

光影

『名乗り…？』

なんだよこのお姉さん…

怖い…

お姉さん

『私はなあ!!両親を殺した生き物を放った夢子だよ!!バァーッッ

カ!!!』

光影

『クソウ…お前か！お前かよ!!クソッ、ブツ倒してやる!!!』

夢子

『フンッ、かわいくないね!!喰らえッ!!』

光影

『げっ!!』

ま、まずい…逃げないと…

光影

『アレ、遅い…なんでなんだよ!!助けて…嫌だ死にたくない…』

夢子

『逃すか!!』ヒュイツ!!

グサッ!!

光影

『うああああ！足が…動かない…ッ!』

夢子

『ふふっ、魔理沙はね…私の手駒よ』

光影

『ふぁー…ふう…ふう…ふはぁ…なんだったのだ』

夢か…

なんだったんだアイツ…

ここはどこだろう、駄菓子が近くに山のごとく置いてある。

光影

『今は食べる気にならない…ごめんな置いた人』

なんか美味しそうなりンゴが鉄格子から投げられたかのように置いてある。取りますか？

光影

『食べますかっつ。ガブツ、シヤリっシヤリっ…ガタツ、痛！』

なんじやこりや!?ヤスリね。

上手く使えば良い物だ…今の状況で役に立つかわからないが』

光影

『扉を開けて出よう…あら、開かない?!』

チツ、俺様のおキックで破壊します。

ダンッ！ドンッ！

グジャアン!!

光影

『なんだこの扉くくく??鎖は…錆びているけど硬いな』

んっ、ヤスリ…これ使ってみよう

数分後…

光影

『おつ、鎖が壊れたな。よし、ドアを開けるか…』

ギシイイイ…

さて、部屋から出れたし小屋から出よう。

ギシイ…

妹紅

『やあ、目が覚めたか。両親の事に関しては…すぐく残念ね…。村人達も慕っていた村長さんご夫婦だったんだからな。若すぎるよ、死ぬにしては…墓の埋葬なら終わったよ。白海ちゃんは泣いてはいないけど…つらい表情をしていたわ。ただでさえ小さい心臓が潰されそうな感じな…』

光影

『先生…』

妹紅

『なに?』

光影

『森を救ってくれてありがとうございます…』

妹紅

『ああ、森か…今回の異変はアイツらの仕業だね…アレ、異変…?』

光影

『先生…?』

妹紅

『あ、気にしないで、墓まで行くわよ』

光影

『う、うん…』

ちよつと海岸に寄り道…

妹紅

『なんだコイツ…メイドか?』

光影

『メ、メイド…なんだそりや』

妹紅

『実は私もわからない』

光影

『ありやりや。しかし、かわいい女の子だなあ…眠っているみたいだが』

もしこの子が起きたら友達になって野球の応援をしてもらおう…。今は忙しいし放って起きたいけど海水を浴び続けていたら風邪引いちやうし宿に寝かせておこう。

少年少女移動中…

妹紅

『村の家は全てガラ空きだな』

光影

『そうだなあ…だからといって盗みはよくない!…と先生から教わったから盗らないけどね』

妹紅

『あ、それピクニック前に言ったやつか…』

それも昨日のはずなのにかんりの過去だと感じる…。何故だろうか。

―宿 蛇寝処―

誰もいない。

妹紅

『うゝむ、真ん中が好きだから真ん中の部屋にするか』

光影

『そうしよう』

バダンっ…

その女の子をベッドの上で横にさせた。

なんだろう…その子すごく冷たい。

まるで…洞窟内で手入れもされずに放置された鉄の棒のような…。

光影

『よしっ…あとは宿屋さん夫婦と看板娘の咲夜ちゃんがなんとかしてくれる…はず』

妹紅

『じゃあ、行こう。バイバイお嬢ちゃん、目覚めたら学校においてよ！』

墓までに行くのが何分かったのか…。

時の流れが遅く感じたのだろうか。

―黒夜家 墓石―

白海

『パパ、ママ…私はこの先どうすれば良いの…？』

霊夢

『白海…泣いてもいいんだよ…私だっていっぱい泣いたよ…ぐすん』

アリス

『インカーネーション軍とかいう集団……なんて酷い事をするのかしら…』

咲夜

『何がしたいのよ、あの悪い連中達…』

正一

『僕が苦手だった野球を克服出来たのに…僕、まだ勝ててないじゃないですか…』

今こうして両親が亡くなり、村人のみんなが集まっているのもアイツらのせいだ…！

クソツ、仇討ち…それだ、それをアイツらにしてやらないと…。

光影

『うつ…うつう……許さねえ、仇を取ってやる…!!』

ドツダツドツダ…

妹紅

『アレ、光影…いない…?!』

次回へ続く

では、参る…

―黒夜家の墓より離れた墓場―

妹紅

『光影…どこに行つたのよ全く』

エレン

『お姉さん！私と捜しにいこっ！』

妹紅

『ああ、いつぞやのエレン……今日もかわいいよ』

エレン

『えへへ、ありがとう♡』

なにこれかわいい。

私この子好きだな！この子に授業ならいくらでもやりたいさ！！

授業…か。慧音元気かな…アレ、慧音って誰だろう…。

エレン

『お姉さん、誰を捜すの？』

妹紅

『光影という村一番のやんちゃ者さ。私つたら本来なら2日目の教師生活なのに…』

エレン

『うう〜残念だよ、がんばろ』

残念を進化させた超残念だがなくつ。

でもなんかエレンって子優しいしかわいいなあ。

まあ、この子の為に頑張ろう。

妹紅

『そうだな、こんなところでくよくよしてたら始まんないもんさ！！』

エレン

『うん！頑張つたら一緒にごはん食べようね、約束だよ！』

妹紅

『よし、頑張ろう！』

二人

『えいえいおー!!』

ーウインド森ー

妹紅

『猫は?』

エレン

『ソクラテスはお留守番だよ…』とんとん『ん?』

霊夢

『あ、えーと…名前はなんていうの?』

エレン

『ふわふわエレンだよ』

霊夢

『ん…どこかで見たことあるような…忘れたしまあいつか。私は博麗
霊夢。あんた達の跡を追ってきたの』

ガキの癖して生意気ねえ。

エレン

『あんたって、1年生なのに生意気な…確かにあなたはどこかで見た
ことあるわ〜』

妹紅

『…あなた幻想郷にある博麗神社の巫女で妖怪退治屋の霊夢…でしょ
う?』

霊夢

『正解よ!私も博麗巫女の血として退治心が騒いで来たわ!!』

…は?

退治心って何よ。

それ以前に、なぜ幻想郷じゃないところに博麗神社が?偶然かも知
れないけど…。

それ以前に、幻想郷…なんだっけそりゃ。

エレン

『あなたも行く？ピクニック楽しいよ!!』

れいもこ

『ピクニックじゃないって』

エレン

『あく忘れてた★』

忘れん坊にも程があるよお嬢ちゃん…。

ーワシタカ山 入り口ー

エレン

『はあく疲れたわ。何気にへびが道を邪魔しているけど強引突破よ』

門番へびさん

『おい、この先は危険だから行かない方が良い!』

ガブリツ

エレン

『きやつ？何、何なの?!魔女だからこれくらいの毒で倒れないけど…

熱いわあ』

妹紅

『ただのへびの癖に私達を追い払っているわ』

蛇語はわかんないからね。

霊夢

『へびね。何か言いたい事があるの?』

門番へびさん

『あんた…へび語わかるのかい!!君達は不思議な少女だが、この先は通すなと王様の命令を下された!だから帰って貰おう』

霊夢

『ええくそんな』

門番へびさん

『女の子達は帰っておはじきでもやってなさい。この先は本当に危険なんだ』

霊夢

『嫌だわ。この先に行った少年を連れ戻しに来たのよ』

門番へびさん

『！その少年は先に行った…俺は止めれなかった。彼は俺との闘いに挑み、勝った』

霊夢

『そう、なのか。事情わかったでしょう？通らせてくれるかしら』

門番へびさん

『あんたらやられたら骨拾いに行けねえから覚悟してろよ。それとへびに出会ったら闘ってでもどかせ、いいな？』

霊夢

『わかりました〜』

え〜と、独り言にしてはすごいわ。

壮大な…。

霊夢

『大丈夫みたい。ただ、この先へびに出会ったら闘ってまでも行くこと。いいね？』

エレン

『はあく〜い♡さっきの霊夢ちゃんすごい！へびさん語を学んだの〜？』

霊夢

『いや、何となく〜』

何となくで通用するのか？

私的にそうとは思えんが。

ーワシタカ山 裏ー

妹紅

『そういえばあのへび以外出ないな…1匹もな』

エレン

『ねえ、何のお菓子、好き？』

妹紅

『とつ、唐突だなあ…私、甘いもの〜かな。村に駄菓子屋あつてさあ

「、そのこのやつがめっちゃ甘美味しいのよー♡」

霊夢

『あ〜！（ポンツ）私も甘いもの好きだわ！だってお茶と合うもん』

エレン

『私は〜ふわふわしてて甘いものだーいすき!!』

”ふわふわ” エレンだけに。

…寒かったか。寒かったか、おいつ！

身体は炎の能力でホカホカすれば良いけど心の中は凍てついた…。
ちよつと悲しいかな。

……

霊夢

『ねえ、アレ何?』

妹紅

『…ん? ってなんだありゃ! 生き物の足跡なのか?!』

それは、巨大な足跡だ。

こんな足を持つ生き物なんて見たことがない…!

エレン

『だいなそく…かな?』

霊夢

『なによそれ』

エレン

『尻尾の生えていて分厚い皮を持っていてすっごい牙持った生き物だよ! 見たことないけどね…』

妹紅

『なんだそりゃあ。長い舌を出して何でも食べるやつかい?』

エレン

『う〜ん…そうじゃないかなあ。適当だけどね♡』

適当かいつ。

全く…。

『シユルルル…』

妹紅

『ああん、なんだい次は』

へび兵A

『俺たちのテリトリーに入るとは…バカなやつらだ!!』

へび兵B

『俺たちはこいつらを餌にしよう!きつとこれは何ヶ月か先保つぞ!!
たぶん』

へび兵C

『ふふふ…王様はこの先には誰も通すなど言われているけど、殺すな
とは言われてないもんね!』

へび兵A

『よし、試しにモブキャラ同然のへび兵D、行け』

へび兵D

『ふへへーっ、行つてやるぜえい!!』

バサツ!

エレン

『へび??:やだ、怖いよお…』

霊夢

『注意して!やつらの頭ん中は暴徒の脳みみたいなものよ!』

はしやらしやらしやららら…

へび兵D

『へっへへえ…俺を暴徒扱いは酷いなあお嬢ちゃん…ジユルリ、これ
は食べがいあるぞお!!』

霊夢

『わっ、来たわね!』

エレン

『きゃーっ!!へびい!!』

妹紅

『おい、邪魔だぜ！私達、今急いでいるのよ！』

へび兵D

『ほおう、俺様を馬鹿にするとは…喰らえつ、毒牙闘技術ツ！』

妹紅

『フンツ、私が避けれる程弱いわねあなた。ま、へびにしてはやるな。シャーンシャーンうるさいやつ程雑魚なのよ!!…あ、そうだ。また襲いかかれば熱い目に遭うよ』

へび兵D

『クソウ、お前つ…ギツタギタにし…う、うあぢいいいい!!!』

妹紅

『へっ、弱いママシだぜ。言ったはずよ、来たらやるって』

霊夢

(クスクス)

へび兵D

『ち、近くの川だあ！逃げろおー!!』

はあ、へびにしては中々やるな。

昨日の不良ガキよりやばいな。

へび兵A

『次はへび兵Fとへび兵Eとへび兵Cとへび兵Bが行け！俺はここで観察している!!』

へび達

『ウへへーッお前らもおしまいだぜえッ!!』

霊夢

『ここは私に任せて！ふうう…:…:…:ハアツ!!』

霊夢は空中浮遊をして、札を数枚もへび達にピンポイントで当てた。

その札の縛り強さにへび達はあっさり降参したけど…

拘束、解除されなかったよ。

へび兵A

『ええい、何グズグズしておる!!俺がこんなやつら丸呑みにしてやる!!』

ドゴオオオオツ!!!

リーダー格であろうへビが降りてきた。

想像以上にでかいな、お前!

呑無蔵

『俺の名は呑無蔵(どんぶぞう)だ…うひひい、お前らにも俺の言葉わかるだろう…? ジュルリ』

妹紅

『じゃ、喋った…あなたへビなの?!』

呑無蔵

『あたりめえだ! しかも俺はなあ、そこら辺のへビより強えぜ! それに人語が喋れる力は王様より授かった…:…:ヘンテコな力だ!!』

霊夢

『ペラペラ喋ってないで来なよ! あんたなんて私の力で封印よ!!』

呑無蔵

『足、見てみる!』

シユパアンツ!

霊夢

『ヒヤッ! イタタ…お尻痛いわあ! 動けない…』

呑無蔵

『俺の無音尾を足に絡めて引つ張ればこの通りだぜ!! ヒーッヒッヒ、コイツは酒のおつまみとして合いそうだなあ!!』

霊夢

『キャツ、スカートの中見られちゃったわ! って、助けて!!』

ビリビリビリ…

呑無蔵

『なんだ? 後ろからもの音が…』

エレン

『私です♡』

呑無蔵

『お前はへビにビビってたガキ!! お前はずっと怯えてればいいものを…!』

エレン

『ハアアアアア………ハアツダアイ!!』

ビリビリビリボカツボカツボカ!!

呑無蔵

『グアア! あ、ガキが尻尾から離してしまった!! 邪魔した罰として、喰ってやる!!』

クパアアアアグシャ!

エレン

『ヒヤツ、近くにあつた岩石がへびに砕かれたわ…』

呑無蔵

『フツフツフ…恐れ知ったかあ?』

エレン

『へびに睨まれたカエルの気持ちがあつたわ…さ、今度はへびからカエルに変身する番よ』

呑無蔵

『減らず口を言いやがって!! 丸呑みしてやるわ!!』

エレン

(藤原さん、れいむちゃん。今よ)

シユパツ!

霊夢

『身体が数秒間動けなくなる札を貼ったわ。どんな気持ちかしら?』

呑無蔵

(ぐっ、身体が自由に動かん! クツソオ、あの浮遊少女いつの間にも!!)

妹紅

『私は特にやる事無いし、炎の鎖で縛っておこう…札は燃えないようにして…』

キリキリキリキリ…ヴオオオ!!

「これで呑無蔵は口を開けたまま、身体の動きが封じられた。

さらに、妹紅の気まぐれで炎の鎖で拘束された。

その熱さに、呑無蔵は耐え難い痛さを感じ続けている!

たとえば札の効果が切れようとも炎の鎖はそれを許さず、暴れば暴

れる程苦痛が広がる…!

まさに恐怖の瞬間だった!!」

エレン

『さあ…で…:…:…:髪が魔法に反応してバチバチしているから早めに仕上げるね。よし、じゃあこれを…』

エレン…:さすがね。

いや、被害こつちに出されちゃ困るけどね』

呑無蔵

(な、なんだこれは!ひいいいい!!)

エレン

『でんきばくだん♡投手はエレンだよ♡』

呑無蔵

(ああ、今頃後悔するよ!お前らのような田舎娘がいるか!)

エレン

『よし…:えいっ!』

「呑無蔵の口内にでんきばくだん炸裂ウウウウ!!!同時に札の効果も切れ…」

ドバアアアアン!!!ビリビリビリビリイイイイ!!

呑無蔵

『ビビリイ〜!!』

ドオーン!

エレン

『はあ…:はあ…:はああ…:やっと気絶したわね。あと、あまりにもでんきばくだん強すぎたから炎の鎖は跡形も無くなったわ』

妹紅

『我々やりすぎたな、うん。次は…:あの洞窟だ、そこを通った先は…:頭谷(かしらだに)だ。気を引き締めよう…:』

霊夢

『頑張らなきゃね』

「門番へびさんから言われた通りワシタカ山のへびとの闘いはお互い本気で闘った。

そして、ボス格の呑無蔵には勝利した。

だが、この先にいるのが最悪の敵である事は、誰も知らない…次回へ続く」

童心

ー洞窟ー

私達がいるのは真つ暗に等しい洞窟。

灯り無き者先が見る事すら叶わず…表現がそれを表しているのだ。
不気味に響く3つの音…すなわち、水が垂れ落ちる音、脳を貫くコ
ウモリの鳴き声、向こうから度々聞こえる悪魔の哭声…。

自然が作り出した洞窟がいかに危険かわかる。

霊夢

『来なきや良かった…怖いよお…』

エレン

『私もよ…やだよ、おばけなんて』

妹紅

『これじゃ進まないし行こう。ずっとここでうずうず言っても仕方
ないわ』

この洞窟は誰からも知られていない可能性が高い。
手入れも全くない……………。

コウモリA

『ピヤハーツハハ！ここを通りたきや、血を吸わせな!!』

コウモリB

『どれどれ、美味しそうじゃないか！ヒエーツヒエツヒエ』

霊夢

『血…?間合ってますからどっか行つてください!!』
いつも通り、霊夢は動物と会話しているわ。

私にはサツパリわからないわ。

コウモリB

『なにい…んじやあそのふんわりとした髪のやつから血を吸わせ
ていただくぜえ!!』

エレン

『いやあつ、やめて！うう…痛い…グスツ』

おい、泣いちゃってるぞ！仕方ない…

やるか。

妹紅

『火炎弾浴びていけコウモリ野郎!!』

コウモリB

『うわっ、なんだアイツ！は、早く抜かないと…た、助けて!!』

エレン

『エレン怒ったよ！電流流すからね!!』

コウモリB

『そ、こそ、そんばやあ!!』バチバチバチ

エレン

『コウモリさん、忘れ物だよ』

コウモリA

『ん、なんだ…:ギャア!!』ドゴオメラメラメラ

妹紅

『全く、あなたは電流流せるの覚えとかないとな』

エレン

『うう〜ごめんなさい〜』

霊夢

『さ、行きましょ、先が長いわ』

一方…

IC歩兵

『ゆ、夢子大佐！何者かによって巨大ヘビと普通のヘビが気絶してました!!』

夢子

『ついにやつらが動きましたか…:それより、女王様からの命令です。1004を捕らえて持って来い、とのことです』

IC歩兵

『へ？冗談ですか、それ…』

夢子

『いいえ、本当です。もし命令に反するのであれば私からの罰が下さります』

IC歩兵

『うう、そんな！俺はまだ死にたくないんだぞ!!』

夢子

『逆らうのであれば処刑とします。気が変わりましたか？』

IC歩兵

『は、はい！』

夢子

『よろしい…なら先に居る歩兵と合流して行きなさい。あなたのような人が何人いろいろとあの1004を倒す事すら出来ませんので、私が楽に捕獲が出来るよう全力を尽くすように…』

IC歩兵

『ほ、報酬はあるんですか?!』

夢子

『人がやっと思える位ギリギリに冷やしたアイスバーを沢山差し上げます』

IC歩兵

『うおお！やったあ!!行ってきますうー…』ダツダツ

しかし…何故1004は生物を襲ったのだろうか…

プログラムがエラーを起こしたのだろうか？

いや、そんなことはありえない、何度も点検はした。

まさか、この山に数多くのヘビがいるからか…？

そんなことはいい、エレンも仕留めないとな。

でなければ歩兵や少佐格がドンドン潰されていく。

それに私の怒りが収まらない。あの激痛だ…自害なんてさせない、私が仕留める!!

そして…

エレン

『そろそろ明るくなってきたわ〜…あと一踏ん張り!』

妹紅

『道中はコウモリ沢山いるからビビるわ』

霊夢

『肝試しに持って来いね…』

肝試し…懐かしいな。

霊夢との初対面はそれがきつかけだしね。

…なんだ、この梯子。

IC歩兵A

『いやあ、やばいなあのバケモノ。殆どの歩兵が蹴散らされたよ』

IC歩兵B

『クシフォス少佐の大剣すら効かないし、まずいなこりや』

IC歩兵A

『ま、クシフォス少佐がやられたし、俺とお前で持ってきたクシフォス少佐の大剣でバケモノ倒そうぜ!俺とお前なら行ける!!』

IC歩兵B

『よし、そうとなれば作戦実行…あ、なんだあのガキ達は』

エレン

『ガキって何よ!私は1000歳も生きているのよ!!』

妹紅

『その大剣くれないか?くれないなら強引になるよ、いい?』

IC歩兵A

『誰が渡すか!!ほら、大剣で闘う…ぞ!!(お、重いく!!)』

IC歩兵B

『おい!俺は棒かよ!!』

霊夢

『あんた達なんかお札で十分よ!!』サツ

ペタリ

IC歩兵A

『うああ〜！いでえ〜！！こんなガキに！！逃げろお〜！！』

IC歩兵B

『つの野郎！！』

妹紅

『あなた如きにやられる私じゃないわ！！』ズドゴオ！！

IC歩兵B

『いだあ〜！に、逃げなきゃあ！！』

エレン

『あ、二人が崖から落ちて出口に逃げちゃったわ！私達も崖から降りるわよ！！』

霊夢

『え？』ガシッ

妹紅

『ちよ…』ガシッ

ヒユウウウ…

二人

『キャーーーーー！！』ズトツ

霊夢

『いてて…つてエレン！』

エレン

『お先失礼するよ』

妹紅

『えっ!?…もう』

―現在地不明―

エレン

『外は山の裏の谷ね…でも、異様な位不吉だわ。生物誰も姿現さない

し』

IC歩兵A

『おい早く逃げろ！こんなところ逃げ出しちまうぜ!!』

IC歩兵B

『あ、大剣がない！取りに行かないと…』

IC歩兵A

『死ぬ気か！俺はもう行くぞ!!』

IC歩兵B

『あ、やだ!!待って!!』

ブオオオ…

エレン

『遅かったわ!』

霊夢

『全くひどいなあ、もう…大剣は妹紅が持っているから安心よ』

妹紅

『重いなあ、ホント。銅製だからねえ』

よく持てるなあ、あの歩兵。

ま、きつそうだったけど。

エレン

『重いのは我慢して。行きましょ』

妹紅

『せっかちななあ』

ーその頃ー

夢子

『こんにちは、お嬢さん。ここは危ないよ』

少女

『やだ。お母様とお父様がここから動いちやダメだって言われているもん』

夢子

『そっか…』

少女

『あ、えつと…お姉ちゃんと遊びたい!』

夢子

『ごめんね、お姉ちゃん今先に行かないとダメなの…ね、我慢してくれるかな?』

少女

『やだつままない!お母様もお父様も遊んでくれないのに…グスツ』

あ、泣かしちゃった…こりやまずいな。

泣き声に気づかれて1004がここまで来たらこの子も食われてしまう!!

夢子

『わかった!お姉ちゃんが今から遊んであげるよ。ね、これで泣き止むでしょ?』

少女

『…ありがとう、お姉ちゃん大好き!』

あくめんどくさいけど仕方ないな。

エリス助けてくれ…!

エリス

『クスツ、夢子ったらエライね』バサツバサツ

エリス居るのわかってんだぞ。

ま、仕方ないか…!

夢子

『よし!いっぱい駆け巡るよーっ!!』

少女

『えへへ、わーい!!』

あの子が私に追いつけるよう身体能力セーブしないとな…

1004の捕獲はエリスがやってくれたら嬉しいのだがねえ。

エレンに関しては…また明日にしよう。

バサツ…スタツ

エリス

『仕方ない、エリスが直々に行くとするか…』

1004の正体とは…？

次回へ続く

不毛となった谷

バサツ、バサツ：

夢子ったら、かわいいわね。

あの女の子：何故だかわからないが、不思議な力を持っているな。もしかしてだが：ま、いいや。

：あ、今1004が見えた。そっちに行こう。

スタツ

エリス

『やっと見つけたわ、1004。大人しく私達の元へ戻って来るのよ』

1004

『グルルルウ：!!』

ダメね、自我を失っている！

私は1004に争いの種を植えてない上に、何度も改良をして暴走を防ぐようにしたのに!!

一体何が起きているの：！

エリス

『この動物より美味しい肉もあるよ、さあ！早く!!』

1004

『グアアアアッ!!』

やつが噛み付いてきた！

私はとつさに羽を生やし、避けた。

困ったな。デカすぎて持って行けないし、噛み付いて来るし。

これじゃ餌を3日3晩何も食べてない犬が飼い主に噛み付いて来るような物だわ!!

幸い、私は神だから死ぬ事はないのだが：。

私の火の息で弱らせてから生け捕りにしたいが：威力が。

なんせ、争いによって散った者の数によって火力が上がるのだから。

つまり、今の火の息で1004を炙るのは、地獄の炎で焼かれるに

等しい…。

まあ、面倒臭い物だが…呪文を使つて封印するしかないな。

エリス

『さあ来いっ！ダイナソースネーク!!』

1004

『グオオオオ!!』

―妹紅。パートー

妹紅

『なんださつきから…雷のような叫びが向こうから…』

ダメみたいね、ここは。

雲もさつきから暗いし、生き物の気配も微塵も感じないわ。

叫び声の主を除いて。

しかし、なんだ…この…なんというか、あちこちに捻り曲がつた棒が落ちている…。

う〜ん、生きて帰れるか？コレ。

エレン

『うう〜、こんなに危ない場所だとは思わなかったよ…。怖いよお…』

霊夢

『私も頑張らなきゃ…いつ、何が来るかわからないわ』

妹紅

『さつきからもそうだけど、道中に木が何本も倒れている…。木をこれほどの力で折る事が出来る動物なんて見たことないな』

エレン

『そうだね！おつきい動物さんがやったのかなあ…私、その動物さん絶対に許さないもんね!!』

エレン、私も同感よ。

それにしても、剣が重いなあ。

銅製で、しかも大剣なんて重すぎてシヤレにならない。

―数分後―

妹紅

『うう…もうギブ…かもしれぬ』

おつ、こんな所に座り心地の良さそうな硬い岩が。
よいしょ、と。

他の2人も座る。

エレン

『なんだかいつも以上に髪の毛がバチバチするわ』

霊夢

『アツハハ、おもしろーい!』

エレン

『むーっ、仕方ないじゃん!私だって治したいよ!!』

霊夢

『クスッ』

少女

『お姉ちゃんだあれ?』

エレン

『(バチバチバチバチ!!) わあ!!髪がバチバチしてる!!』

霊夢

『うるさいよお』

エレン

『仕方ないじゃん!というか頭部だから私の方がもっとうるさいよ!!』

妹紅

『二人がうるさい!』サツ

二人

『ごめんなさい〜』

はあ、ガキって大変だわ。

うるさいからね。

あ、私もガキだわ。

少女

『あ!お姉ちゃん来た!』ぎゅっ

妹紅

『よしよーし…大丈夫?私はね、藤原妹紅っていうの』

少女

『えへへっ、私は…あ、名前、ないんだ…ごめんなさい…うう』

妹紅

『うああ〜泣くなつて！よしよし、大丈夫だよ』

この子…すっごい肌白いし、毛色も村人とは違う。

髪の毛の色はアリスに近いけど、白い毛も混じっている。

あと、瞳が赤い…それに、体全体が眩しいし…何者だ？

あと、ほっぺたがむにいくつてしててかわいいなあ。

少女

『妹紅お姉ちゃんはあつちにいる人と来たの？』

妹紅

『そうだよ。(クイツ)二人のどっちか、この子の面倒を見てくれないか？』

エレン

『あら、女の子！私と同じ年かなく？(身体的に、の意味だよ)』

少女

『うーん、わかんない！あなたは私と遊んでくれるの？』

エレン

『もちろん！…霊夢ちゃん、藤原さん、私が残るね!!』

霊夢

『は〜い、んじゃあね〜』

妹紅

『悪党が来たら遠慮のえもやらずにコテンパンにしろよ！』

二人

『バイバイ！』

―さらに数分後―

妹紅

『はあ…はあ…剣が、重い…なんでこんなもの持って来たんだろう…グハッ』

霊夢

『いや、持って来た方が良いよ。エレンが誤って触り、ビリビリになった剣をあの子が触ったら感電しちゃうし』

妹紅

『ま、そうだよな』

…なんだろう、アレ

霊夢

『なにあれ』

妹紅

『同じく。気になるわ』

拾ってみた。

どうやら、これは光影の靴だ。

なんてことだ…。

妹紅

『嫌な予感しかしないわ。先に進みましょう』

霊夢

『……………ハッ！あんたは!!』

夢子

『久しいね、霊夢。随分と無様な姿ね』

霊夢

『うっ、うるさい！これはね、なんと言うか…えっと』

夢子

『転生。そう言いたかったの？』

霊夢

『…名答ね』

話が付いていけない…。

夢子

『まっ、いいわ。その先に来なさい。良いものが待っているわ』シユッ

…

霊夢

『久しぶりだわ、夢子…今回の異変の首謀者かしら?』

妹紅

『夢子っていうのか、さっきの金髪メイド。知り合いなのか?』
『というか、メイドにしては物騒なやつね。』

短剣を所持していたし。

霊夢

『悪い意味で知り合いよ。そんなことより、早く行きましょ。何があ
るかかわからないけど…』タツタツタ…

嫌な予感だわ…。

生きて帰れたら良いんだけど。

―最奥部―

夢子

『待ちかねたわ。さて、これがなんだかわかる?』

霊夢

『ま、魔法陣?!』

夢子

『正解よ。ま、この先はお楽しみに。あいにく私は今、闘えないの。
だって、招集がかかったのですから。じゃ、私は一足お先に』

霊夢

『あ、コラー!待ちなさい!!うぐぐぐ、飛べない!!』

『そういうと夢子は上空にある巨大な飛行機のはしごを登って行っ
た。』

そして、巨大な飛行機は彼方へ飛び立った…。

妹紅

『魔方陣が意味するのは…』

霊夢

『不気味な音が鳴るし、大きいし、紫色に光っているから不気味ね』
『夢子が描いたのか?』

上手に描けているわね。

…!

なんだアイツは…!!

まさか、これはあの怪物を召喚する為に描かれた…魔法陣!?

怪物

『グオオオオ…!!』ズタツ!

霊夢

『気をつけて、奴はただの生き物じゃない!妖怪よ!!』

妹紅

『そんなのわかってる!気をつけろよ!!』

これが死闘の始まりだという事を、少女達は後にたつぷりと味わうだろう…。

次回へ続く

造られし兵器

グオオオオ…

エレンと少女は感じた。

向こう側に恐ろしい怪物と魔力という物を。

悪魔だということを…

エレン

『藤原さんと霊夢ちゃん…大丈夫かなあ』

少女

『エレンちゃん！次はなににして遊ぶ？』

エレン

『ん？うーんとね、ちよつと…あつちに行きたいの』

少女

『えー、やだよ!!あつち側怖いもん!!』

そう言われても。

向こう側から恐ろしい程の魔力が伝わってくる。

もしかしたら、二人が魔物に襲われている可能性が…!!

エレン

『ごめんね、行かねばならないからそこで待っててね!』

少女

『私も行く!!』

悪魔

『グオオオオオオオオオオオオ!!』

妹紅

『な、なんだコイツは…デカい、デカすぎる!!』

霊夢

『とてつもない邪気を放っている…まさか、妖怪!?!』
ついにやつが魔法陣から完全に出た!

あの頃のように妖怪をすぐに倒せるような力があれば、こいつを楽に倒せるのに…。

ぐうー。

霊夢

『コイツに踏み潰されたら一巻の終わりよ!全盛期ならこんなやつ封印できるのに!!』

エレン

『霊夢ー!妹紅ー!心配したから来たよー!!』

!…その声は、エレン?!

少女

『えへへ、私もついてきたよ!』

お、お前まで…。

妹紅

『エレンはともかく、その君!ここは危ないから…うわっ!』ドガ
ンツ!!

やはり危なかった…やつに踏み潰されるかと思ったわ。

ふっ、仕返しするか。

妹紅

『おい、なに踏み潰しに来てんだ!これでもくらいな!!』ブオ!

火の玉はやつの肩に命中したが、びくともせん。

なんだ、この耐性力は…!

エレン

『私が相手よ!あんたなんか立てないようにしてやる!!霊夢ちゃん、
お願い!』

霊夢

『オツケーイ!私の華麗なるお札捌きも見るが良い!!』スタタタツ!

悪魔

『グ、グオオオオ…!!』

力がなかりうと霊夢は霊夢、実力は本物だわ。

どうやら、空を飛べるみたいね。短時間しか披露しなかったけど。
エレン

『ありがとう霊夢！私もいつくよー!!』ビリリ、バチイン!!
見事に的中！

鎧には大量の電気が伝わっている…アレ、なんか様子が変わだ…。

悪魔

『グオオオオオオオ…!!』ビリッ

霊夢

『えっ、封印を早く解いたなんて!?!』

エレン

『金属製であるはずの鎧を電気をまもっていても生きているなんて…』

一方…

ブロロロロロロ…

夢子

『ありがとう、エリス。やっぱりヘリからの見物は中々の物ね』

エリス

『そうだねえ、あいつらの無様が見て取れるわ!!』

あ、生きて持って帰れるか?コレ。

夢子

『随分とすつごいバケモノ作ったわね』

エリス

『私が一晩で錬金したの。中々の物よ』

夢子

『あらあ、素敵ね』

エリス

『対エレンに製作したのよ。実際に5cmのゴム製の皮を有しているし、あの悪魔は痛みを感じないやつだからね』

夢子

『なるほど、道理でエレンに強い訳だ。あ、生捕り設計か？』

エリス

『もちろん！エレンの生命反応が薄くなったら攻撃を止め、掴んでこつちに来るわ』

夢子

『よくやるなあ…あ、あの血に染まったかのような鎧はなんだ？』

エリス

『ゴム製の皮だという事を活かして製作したステンレス製の鎧よ。私自慢の鎧をリスペクトして、大量の血を塗ったわ。惜しむらくは作業中ザコ（インカーネイション軍の歩兵達のこと）が臭いと騒いでいたから臭い消しちやっしたことかな』

夢子

『ああ、だから血に塗られた鎧なんだね。血生臭さがあればアイツらも狂っていたのにねえ』

エリス

『誰もいない所でパパーつとやって魔法陣にぶち込めれば良かったわ。血の臭いに抵抗なさすぎよ、お前達!!』

IC歩兵A

『んなこと言いましたも…』

IC歩兵B

『エリス様、あなた様の悪趣味は俺達には無理でございます。だから…』

夢子

『愚か者めが!!』バチンッ!

エリスは様付けも敬語も嫌いだと言う事を知らぬとは…!

エリスが触れるまでもないわ!!

IC歩兵B

『痛え〜!!夢子大佐、平手打ちはやめてください!!』

夢子

『あなたもよ』

IC歩兵A

『ひい、助けてください！なんでもするからさ、肩揉みもする！靴磨きもするからさあ!!』

夢子

『私に媚ようとはなんという無礼な事を！あなたはこれをくらいなさい!!』ドゴオ!!

IC歩兵A

『プギヤイツ!!』バタツ…

はあ…グーパンはさすがにやりすぎたわね。
おかげで気絶しているわ。

エリス

『やるわね。さて、話の続きよ』

夢子

『う、うん』

エリス

『実はね、爪も身体に付いている刃も頭の巨大な刃の角も金属なんだよね。そして鎧も金属で、皮はゴム製…あとはわかるな?』

夢子

『電気まといし鎧は誰の攻撃を受け付けず、帯電した爪と角は正に雷神の如く…』

エリス

『当たり前よ。エレンは1000年以上生きようとも魔女故に成長しない。そして、幼き故に考えもまとまらない…』

夢子

『ふっ、やつの冒険ごっこもこれにて終了だな』

エリス

『白髪の少女と黒髪の少女もいるな…二人は闘えるみたいだな、コイツらも生捕りにしたい所だな』

夢子

『ん…あ、あの子は！さつき遊んで仲良くなった女の子!!』

エリス

『アレがあなたと遊んだ女の子か…両脚を畳みながら広げている…女の子座りをして怯えている。悪魔によほど怯えているのがわかるな』

夢子

『助けないと…！』

エリス

『もう遅い、ヘリが悪魔の尖爪を食らったら一撃で抉れてしまい、1004が脱走してしまう』

夢子

『そうかい…あの子、泣いてる…ああ、こつちまで泣きそうだから奥のベッドルームにいるわ』

エリス

『あ、うん。了解』

エレン

『なによ、この強さ…みんなやられてしまったわ！』

霊夢ちゃんは脚の骨が折れて一時的に再起不能ね。

藤原さんは満身創痍で動けない上に喋る事すら出来ない…残るは私、そして泣きながらうずくまっているあの子…ああ、まずいわ！

少女

『エレンちゃんもうやだよ、帰りたいよ…』

エレン

『安心して、私がこんなやつ倒すから!!』

帯電しても生きている…まさか、こいつの皮はゴムとでも!?

あと、電気が目の方に…嫌な予感がする…!!

悪魔

『グアアアア!!グオオオオオオオ!!』ビリリリリリッ!!ピシユン!!

エレン

『うぐっ!!』

なによ、この威力…!

傷口から血が止まらない!

少女

『エレンちゃん！死んじやだよ！あなたは人間で唯一私とお友達になつてくれたんだもん！悪いオバケは私がやつつけるよ!!』

エレン

『来ちゃダメ！私はあなたを死なせたくない！無関係なあなたをこれ以上巻き込みたくない!!』

もはや、ここまでね…。

あの怪物に喰われて力の源と空腹の満たしにされる私って…。
なんかやだわ…。

悪魔

『グオオオオオオ！』ガシツ

少女

『あわわ、エレンちゃん!』

悪魔

『グルルルル…グオツ!』

少女

『キヤツ!』ピシユン!

エレン

『アレ、なんで生きているんだ、私…』

…うわっ、でっかい腕から先がないわ!

あの子の所に行きたいけど指、掴んだままで離してくれないわ。う
ん。

少女

『あ、エレンちゃん！大丈夫?』

エレン

『大丈夫じゃないよう。指から私をほどいてよ』

少女

『待っててね！よいしょ、うつ…ぐっ！』バタツ

あの子、あまりにも指の力が強すぎて、足が後ろに下がりすぎてバランスが取れなくなったのか、倒れちゃった。

ああ、ゴム臭い手の中にいるのやだわ。

エレン

『どうしよ〜！しくしくしく』

一方…

エリス

『なんだったのだ、あの光線は…』

あの女の子、光線を出し、私の兵器の左肩を破壊したわ。中々やるわね。

そろそろこの兵器も終わりね。

観戦も中々の一興。奥で寝ている夢子に見せられなかったのがもったいないわ。

???

『突然だが失礼する、雨の後に埴輪が地面から出るのをご存知で？』

エリス

『知らないわ。それにあなた、上空にあるへりに登り、歩兵を音もなく気絶させるなんて大した者ね』

???

『そうよ。では、お前の名前を聞こう』

エリス

『ふふふ…私は』

夢子

『エリス、こんなやつに名乗る必要などないわ！ここは私が引き受けるわ！』

???

『こんなやつって…まあいい、やり合う気はないから去るわ』

夢子

『待てっ!!』

エリス

『行ったか…』

エレン

『うう〜ダメだあ』

きつくなってきた…。

やつはまだ気絶しているみたいだからまだいいけど…。

スタツスタツ…

あら、なんか足音が…。

???

『そこのお前。今から私はその指ほどくからじっとして貰ってもいい?』

エレン

『あっ…はい』

ガシツ…

???

『フンツ!!』

エレン

『わっ！とけたあ！ありがとう、お姉さん！』

アウイーナ

『私はアウイーナ・エイチだ。よろしく頼む』

エレン

『私は、エレン。ふわふわエレンよ』

アウイーナ

『ふわふわ…？それより、そっちで倒れている怪物はなんだい？あの飛行船との関連性は？』

エレン

『飛行機にいる悪いお姉さんが出した悪魔だよ！』

アウイーナ

『そうかい…』グゴゴゴゴ…『ん、起き上がったぞ怪物が』

悪魔

『グオオ…』

エレン

『はっ！また動いたわね!!』

アウイーナ

『この様子だと、あの怪物は右肩から下を失っている。それにどこか機械油の臭いがする…』

エレン

『機械油の臭い…そして、肩から下は肉が露出している…あ、もう私勝てるかも』

アウイーナ

『どういうことだ？』

エレン

『お姉さん！そこ、退いてくれるかしら？危ないからね？』

アウイーナ

『わかった』

エレン

『ありがとう！さあ、そののでっかいオバケ!!あなたはここで敗れるのよ!!』ビリビリッ

私の魔法をとくと見よ!!

悪魔

『グオオオオオオオオオオ!!』ドスンッ!

アウイーナ

『こ、これは、電気!?お前は魔法使いなのか!?』

エレン

『そうだよ、お姉さん!私はね、電気の魔法が得意なの!!』ビリリリッ

アウイーナ

『そうか…ふふっ、それ私に撃ってほしい』シャキンッ

アウイーナはそういうと、懐から剣を出した。

しかも、銀色に光っている…まさか、金属製?

エレン

『お姉さん、本当にいいの?』

アウイーナ

『いいぞ。だから、撃ってくれ』

エレン

『本当に本当にいいの?』

アウイーナ

『本当にいいぞ、さあ、撃て!』

エレン

『本当に本当に本当に?』

アウイーナ

『あーもう!本当にいいってば!!』

エレン

『ほん…』

悪魔

『グオオオオオ!!』

ピキンッ

!?

アウイーナ

『全く…困らせる子ね。でも子供っぽくて好きだわ』

エレン

『すごい…両手で掴んで怪物の足を受け止めるなんて…』

アウイーナ

『そこを退きな。私が移動させて安置されている少女3人を連れて』

エレン

『う、うん…』

アウイーナ

『フツ、これで周りが怪我をする心配はなくなったな。行くぞっ！』

悪魔

『グオオオオオオオ…！』ビリビリビリビリッ

ほう、先程私が、エレンの電気を吸収した刀をやつの鎧に当てたら鎧全体に行き、そして次に目に到達するのか…。

どうやら、その電気を利用して光線を出そうとしてる…なにを無駄なことを。

悪魔

『グオオオオオオオオオオ!!』ピシュンッ！

アウイーナ

『貰ったよ、その電気。じゃあ、そろそろお前を処刑するね』ビリリッ

悪魔

『グオオオオオオオオオオ！』ドスンッ！

アウイーナ

『きかぬなあ。この遅さでは私に追いつけないぞ』

さて、あの巨体の怪物の傷にどう活かしてそこまで行くかだな。

洞穴の壁を蹴って行くのを利用するか…。

悪魔

『グオウツッ！』ズドンッ

考えていたらいつの間にか握り拳が振ってきた。

だが、この程度では当たらんよ。

スタツスタツ

ストツ

アウイーナ

『どうだ、肩に獲物が乗っかる気分は。では、とどめだ!!』ビリッビリ
リッ

グサツ

エレン

『ふう〜。エレン疲れちゃった、よっこいしょ』

女の子3人を背負ってここ(洞窟谷側の入口)まで来たんだけど、疲れちゃった。

はあくあつと、早くシャワー浴びたいなあ。

ドオーーーーーーン!!

エレン

『ふあく〜?なんの音だろ』クイツ

うわっ、アウイーナさんのいた洞穴が跡形もない…。

うう、心配だわ…!

あの洞穴があつた所の近くに行かなきゃ。

数分後…

エレン

『うう…ゲホツゲホツ』

煙が立ちこもっていて、しかも臭い…。

あの時の山火事位ひどいわ。

残念だけど、あの爆発で生き残れそうにないわ。

エレン

『さよなら。アウイーナ。御冥福をお祈りするわ』

???

『コラ、勝手に殺さないの』

エレン

『…ん?』

煙の中に誰かの声…?

幽霊かしら…?

???

『私よ。アウイーナよ』

エレン

『あ、アウイーナさん！よかった…!!』ぎゅっ

アウイーナ

『これで、やつは倒したぞ。お前達のお陰だ、ありがとう』

エレン

『こちらも倒してくれたお礼を言うわ。ありがとう…!』

私はそう言うのと、アウイーナさんはそそくさと、どこかに行った…。

霊夢

『おーい!!』

霊夢ちゃん!

よく見たら、藤原さんと山の女の子もいるわ!!

藤原

『無事か、エレン…?』

エレン

『大丈夫よ！私があなた達をあつ洞窟まで避難させた後、あの怪物を電気でドーンッ！とやったのよ?』

少女

『わあ、すっごくいい…エレンちゃん、やるね!』

エレン

『えへへ、すごいでしょ?』

本当はアウイーナさんがとどめを刺したんだと思うけどね。

まあ、3人は知らなさそうだしいつか!

霊夢

『よし、帰りましょ〜つと、もうクタクタよお』

藤原

『そうだな、帰ったらしばらく休憩して、また光影を捜しに行こう！』

霊夢

『そうね、次はみんなと一緒に行きましょ！』

エレン

『いいね！よし、村までレッツゴー!!』

少女

『……………』

あれ、この子向こうを覗いてどうしたんだろ。

あなたも村に来てほしいけどなあ。

エレン

『どうした…のっ?』

少女

『なんでもない…よっ!』

エレン

『ねえ、せっかくなら私が行く村においでよ!』

少女

『あ、うん！行くー!』ダツダツダツ…

今まで、村人達は悲しみを知らなかったのだろう。

特に何気ない会話を交わす者。農業をする者もいれば、魚を獲る者

もいた。

皆は動物と優しく、村人達は動物とは友達同然であった。

喧嘩は滅多に起きず、争いも一度も起きなかった。

ありふれた1日、そして…入学式になるはずだった昨日。

桜の花が舞い、花も美しく、空も綺麗で、カエルが鳴く美しい川。

だが、それらを破壊したのは、この村に似合わぬ客達。

木々は燃え、花は焦げ、空は煙に覆われ、川も煤に汚れた。

そしてやつらによって、異様な形をし、心が壊された動物も現れてしまい、自然の環境は破壊された。

中には、自分以外の家族を壊された人もいた。

あの綺麗な空に飛ぶ、不吉な飛行船。

なぜこの村に攻めてきたのか？

そしてやつらの本当の目的は何か？

少女達の悲劇は、

今より始まった……………。

―第1章―

済

第2章 昔に取り残された者たち 薄幸の孤立嬢

Z Z Z…

ドドドドドン…ドンドンツ

ドツドドドツドン！ドツドン！！

ドンドドドツドン！ドドドドドツドン！！

ドツドツドツドツドツドン…

白海

『こんな夜遅くに汚いソックを…どうしたんだろ』

あれから5年間は他との関わりを絶っていたのに…。

一体誰が来たんだろう…。

悪い人達だったら…うゝ、眠い…。

さて、ランタンを持って部屋からでおつと…。

ガタガタガタガタ！

白海

『ヒヤッ！何、何なのー？』

うわあ、ランタンが動いている…！

浮かびながらこつちに突進して来るわ！

白海

『危ないから落ち着いて！』

一向に止まる仕草を感じない…仕方ないわ、

これだけはやりたくなかったけど、

壊すしかないね…。

白海

『はっ！！』パライーン！

うちの正拳突きで、

ランタンはこわれた！

うっ、ガラスの破片で傷が…。

しかも、溶けた蠟がくつついて熱い！

白海

『例え割れていようと、火が点いていれば動くみたいね…火が露わのままになったランタンなんて、ただのガラクタよ!!』
でも、割れて尖った所が危ないわ。
しかも突進してくるんだから当たったら致命傷よ。
よし、ここは目をつぶって…。

キャッチ！

白海

『えへ、捕まえた♡』ふーっ

よし、消えた！

これは危なっかしいからほかしましよ。
作ってくださった方、ごめんなさい…。

ドンドン！

あ、忘れていたわ。

白海

『は〜い、待っててね』

パジャマのまま出ようかなって思ったけど、
さすがにダメだよな。

だってお母さんにも言われたし…。

あ、そうだ…。

未来に、うちがすつごくおつきくなった時用にお母さんが作ってくれた服があるんだった…。

ええつと、確か…服を着る部屋があったはず。

よし、行こつと。

白海

『すみませーん、まだ待って貰ってもいいかな？』
く少女移動中く

暗いわね。

ランタン、さつき壊したから手元にないわ。

でも、暗闇によって鍛えられた暗視力はすごいわ。
まるで昼みたいに周りが見える…。

あ、あった。お母さんが作ってくれた服だわ。

…

よし、黒い半ズボンと白い半袖のYシャツに黒いネクタイを首に…
さらにその上、ロングのワンピースを着て完成！

…というわけではない。

あとは横髪と後ろ髪を留める為にリボンで…よし、今度こそ完成。

???

『キヤーーーーーなんかいるうーーーーー!!』

!?

玄関からね！

すぐに向かわないと…！

く少女走行中く

ガラガラガラガラ…

白海

『あの、どうしたの…うわお、人形が人に襲ってる！さつきうちも同じ
ことされたわ!!』

???

『ちよつとくこれどうにかしてくれませんか?!うひゃ、いたつ!』

あ、なんとというか。

なんていつたらよいのだろうか…。

うむ…まあはつきりいうね。

あなためんどくさいよ。

白海

『うちに任せて…この人形は、ぼこしてあげるわ!!』
よおし、さつきと終わらせたいから…。

そこにあるちよつと手頃のサイズよりでかい角材で行きますよ。

???

『うわ、角材…こりやす…』

白海

『今は亡き、うちのお父さんの友人にね、木こりさんがいたの。その木こりさんが分けてくれたみたいで…』

???

『ほう…(ささくれ、刺さらないか心配なんだけど…)』

さーて、人形が突進してきて間合いが付いた瞬間にいくわよ…。

???

『わっ、人形があなたに来ますよ!』

白海

『とくとご覧あれ、うちの角材…やっぱやめた、一発うちのボカンで決めるわ!!』

ドゴオ

S M A A A S H !!

人形は彼方に吹き飛んだ!

Y O U W I N !

白海

『ふう〜。大丈夫?怪我はない?』

???

『大丈夫ですよ』

赤い髪の毛の女の子なんて初めて見たわ。

すっごくキレイ…。

白海

『あなたの名前は何?』

???

『V I V I Tと申します。どうぞ、よろしくお願いします!』

白海

『V I V I Tね…うちは白海ってゆーの。よろしくね!』

V I V I T

『おや、日本人のような名前に反して外見は…日本人というより、ヨーロッパの方にも見える…身長がでかいからオランダの方かな…?ま、とにかく不思議な元村長の娘さん!よろしくお願いします!』

お互い握手した。

気のせいかな、この子に生命的な生きている感じが…。

V I V I T

『白ワンピース、似合いますね』

白海

『あら、ありがとう！お母さんが作ってくれたワンピースよ。あ、実はね。この下には黒い半ズボンと、ワンピースの上から少し見えるからわかるだろうけど、白いYシャツも着ているわ』

V I V I T

『小さな黒ネクタイも相まって白黒的ですね！』

白海

『白黒ねえ…』

V I V I T

『…あの、少々顔色悪いですよ。大丈夫ですか？』

白海

『寝起きに闘ったから疲れたかもね…お顔洗ってくるわ』

うちはさっぱりする為、うちにとつては暗くないけど暗い、洗面室に来たよ。

でも、きちんと顔が見たいから提灯に火を点けてつと…。

よし、これでよかろう。

ジャー…スツ

顔を洗った、まだ顔色が悪い。

最近笑顔もない…。

うちって、幸せなのかな…。

そう思いながら、靴下を履き、黒いストラップシューズを履いて外に出る。

真夜中で真っ暗だ、周りが完璧に見えるとは言えづらい。

ここは提灯を持っていきたいが…貴重なので、壊したくない。

それに、V I V I Tは暗さに関して何も口にしていない。

おそらく、慣れているのだろうか…。

V I V I T

『あなたに案内したい所があります。ついてきてもらっても…いいですか?』

白海

『いいよー!あと、V I V I T。今日からお友達になろうよ!』

V I V I T

『いいですよー!ニコ!』

握手を交わして友人となった二人。

お互いは見知らぬ同士であるものだが、果たして仲良くなれるのだろうか?

次回へ続く

近くに不審な人影が…

???

『さすがだな、たまたま起きた超自然で動いた、私の投げ捨てた人形を取り乱さずに倒した…』

霊夢の友人のやつ…。

両親と兄がいないから弱体化しているであろうと思っただが、

まさかこれほどまでに強いとは……!

???

『変だぜ』

次回へ続く

懐かしき山の自然

V I V I T

『さて、案内する場所ですが…えーと、えーつと…はい、山ですね』
山…。ワシタカ山ね。

途中経路であるウィンド森を正面突破で切り抜けるにはあの憎い軍への許可がいるみたい。

うちが隠し通路から裏に回って監視していた時、子供が通る際に門番へ許可を取っているのがわかった…。

隠し通路はうちだけが知っているし、気づかれずに行くには音をあまり立てずに木を登ったり遠くにジャンプしないと通れないからね。

V I V I Tには恐らく無理よ。

白海

『山ね…どこから行くのかしら?…』

V I V I T

『本来ならあの門を通るのですが、どうやらあなたはあの人達に敵対されているようなのと、今の時間帯では捕まってしまうので、どうかして目を盗みましょう』

白海

『了解したわ。うちの家に睡眠作用のある薬があるのよ。それを利用して、やつらを居眠りさせるわ』

V I V I T

『いいですね!では、この坂から降りて行きますか』
数分後…

門番 A

『ふあくあつと…みんな寝静まってんなあ』

門番 B

『そうだなあ。今頃バーにいるやつら酔い潰れてんだろなあ』

門番 A

『眠気覚ます薬があればなあ。うつ、ぐうぐう』

門番 B

『コラ起きなされ!』

門番 A

『悪い悪い、寝てたみたいだなあ、ははっ』

白海

『あのおじさん達…そこ、通りたいんですが…』

二人は今でも眠そうだわ。

かわいそうに、ここで突っ立っていること位しかないのね。

門番 A

『あーこのかわいらしくもなんともないガキの声は、我らに逆らっている白海とかいう不登校のガキだなあ?』

門番 B

『この不幸せ者!どっか行け!しっしっ!!』

白海

『あのう、あなた達にプレゼントがあるのですが…』

門番 A

『あ?なんだあ?んじやあ眠気覚ますやつくれや』

白海

『ちようどそれなんです!どうぞ、お二人さん…役に立てたら幸いです』

VIVIT

『白海さん…頑張ってますね』

睡眠薬よ。

お身体と給料の休憩をありがたく受け取ってね。

そして、二人は同時に呑んだ。

門番 A

『おほ〜こりやすごい!眠気が覚ま…ぐっ…ぐうう…』

門番 B

『おや、なんか寝たけど、後から来るのかなあ…ふわあ、眠いなあ…グ
タツ』

面白いわ。

んじやあね〜♡

V I V I T

『あ、私のこと忘れないでください〜』

白海

『あ、ごめんね！いこつ！』

???

『はあ〜、なに寝てんの…全く、役立たずだぜ』

門番 A

『ぐがー…ちなんとかに椅子叩かれるう…』

門番 B

『ぐうー…でつかいへびを、捕まえたぞお…』

なんとというか、あんた達は私の名前覚える気ないのか？
変なやつらだぜ…。

???

『ポンコツう、これでも喰らえつ!!』ビリビリッ！

門番達

『ギヤア〜!!』

???

『もう、あんた達の給料は減らしてやるからなく!』ダツダツダ…

門番 A

『あれ、なんかされたか?』

門番 B

『モヒカンがボサボサだぞ、お前』

門番 A

『お前もじゃねーか。しかもコゲくっさ』

白海

『森も随分変わったわ。今では野生動物が人間を襲うようになったり、合成された奇怪生物達がそこら辺にいるし…しかも、道が石のようなかで形成されているわ。まあ、村にも言えることだけどね』

V I V I T

『アスファルトっていいいます。私の地元はここではないので…』
アスファルト…5年前にはうち達にとっては珍しい物だわ。
自然にこんなのを敷くなんて、考えがおかしい…。

コウモリ

『キキーツ!』

V I V I T

『キャツ! 本当に襲って来るわ!!』

白海

『コウモリ! この子は傷つけたらダメよ、ね?』

コウモリ

『キキツ、キー!』バサツ…

退散してくれたわ。

手懐けておいて良かった、ひやひや。

V I V I T

『怖いですね…この森』

白海

『5年前は自然が良くて綺麗だったの。けど、ゴミを不法投棄をする人たちや、娯楽の場を作りたいが故に多くの木々を伐採されたの』

V I V I T

『そうなんですか…』

こうして、色々雑談をしながら、なんとか山の入り口に着いた。

白海

『ここはワシタカ山…今では誰にも目をつけられなくなった、哀しき山…』

V I V I T

『大きな山ですよね…うう、きついかも』
地元からしたら、こんなの楽チンよ。

白海

『登れる?』

V I V I T

『無理ですよ…まあ、私良い物持っているので、それお使いください』

白海

『良い物？このへんてつもない、使いやすそうなホウキかな？』

まさか…勢い良く左右にはきながら行くのかな？

いや、考えすぎか。

V I V I T

『では、このホウキの上にお座りください』

はく方を後ろにして、手に持つ辺りに彼女が座っている…。

何がしたいのか。

白海

『うちには無理よ。だってホウキ小さいし、うちは大きい（170cm）から…そうだ、うちは全力で走って登るから、競争しようよ！あなたはホウキ使っているよ』

V I V I T

『わかりました。では、行きますね』

ビューン！

白海

『ビヤッ！ホウキが…空を飛んだ!? まずい、速く行かなきゃ…』ダダダダ…

中間にて…

白海

『はあ…はあ…中間地点か。まだ体力はあるけど、湧き水を飲んでから行こう』

I C 歩兵

『この山はどうですか、シーフ少佐』

シーフ

『いかにも俺が大ツキレエな田舎つくせえし疲れる山だなあ！あゝ、木を伐採して気持ち良く出来るゴルフ場でも作りたいなあ!!』

なによ、アイツら…。

しかも、鎧ガツチガチの仲間とは違う、村で見かける海賊みたいなタイプだ…。

さらに少佐格なんかもいるなんて…。

仕方ない、ここは退却よ。

IC歩兵

『ん？なあんか走る音しましたね、シーフ少佐？』

シーフ

『お、追いかける！この時間帯に出た村人は許さねえ!!』

ダツダツダツダツ…

まずい、追っかけて来たわ!!

歩兵は特別速いって訳じゃないけど、シーフとかいうやつは一段と速い…!!

1対2なんて勝てないよ!!

シーフ

『このシーフ様を舐めると、いかんぞおく!!』カチャリ

あ、アレは！

ボウガンらしき物!!

IC歩兵

『さっすがシーフ少佐！麻痺毒を矢先に塗って、それを走って行ったやつに当てるんですね〜?』

見つかったら危険、見つかったら終わり…!

走って頂上に辿り着かねば、命の保証はない!!

白海

『もう少しで、頂上に…』

シーフ

『見つけたぞ〜!!ん、貴様は白海とかいう不幸で言う事聞かずのガキの一人だなあ〜!』

なにつ！バレた!!

まずい、脚を狙う気だ！

シーフ

『そこから動くなよ〜？よし、狙いを定めて…』パンツ!!

ふっ、

仕方ないなあ…。

白海

『はぁぁー!!』パシユン!

シーフ

『なんだ!?!』

IC歩兵

『空中に滞在する矢が…切れてます!』

シーフ

『なんだと!しかも、矢がびしょ濡れだ!なんだあの小娘は!!』

白海

『うち?今から始末するあなた達に教える気はないわ。さあ、今度はあなた達がやられる側よ』ピシユン!

IC歩兵

『うわ、手から水の玉…うわあ、ばば、うばぼ!!』バタツ

白海

『まずは一人目!次はあなたよ!!』

シーフ

『付き添いをやっつけたな!やってやる〜!!』

白海

『奥義!ウォーター・スライサー!!』

シーフ

『あふえ?』バタツ

白海

『しばらく歩けないよう両脚に傷つけておいた。あなたとその付き添いは生かしておく…縄で巻かれたまま、あなたの嫌な山にしばらくいなさい』

シーフ

『ちよつ、ちよつと待て！上司に叱られてしまうよ！！だあー！こんな山行かなきやよかつたクソ喰らえ！！』

白海

『べーだ。参ったでしょ？』

シーフ

『ま、参ったよ！もうあんたには襲わねえからよ！！ヒイ〜！！』

（バカなやつだ、この後俺の部下達が来るのを知らずによお〜！！）

頂上に…着かねば…。

VIVITは、もう着いちやったのだろうね。

次回へ続く